
魚人転生者と召喚被害者

浩太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魚人転生者と召喚被害者

【Nコード】

N5258X

【作者名】

浩太郎

【あらすじ】

もつとマトモにゲームやっとならば…と後悔したけどもう遅い。とあるゲームな世界の魚人に転生した女性が、召喚されたはずの甥っ子を探してまわるお話、です。甥っ子大好き女が貧乏くじ引きながらがんばります。

超スローペースの気まぐれ更新、の予定が気づけば週1、2回の更新となってます。

R15も残酷描写…も保険です。

001 色々思い出しました

「！」

アレイスタは跳ね起きた。いつもの室内が視界に映る。薄暗いから、まだ夜明け前なのだろう。どくどくと激しく脈打つ胸、頬にかかる赤毛。段々と冷えてくる汗が冷たい。

「…もつと…」

震える両手を動かし、ゆっくりと顔を覆う。

「…もつとレベル上げておけばよかった…！！」

吐息混じりに吐き出したあと、そういう問題じゃないと気付いた。

アレイスタ・ゴメスは魚人族の雌性体、孵化してから6年になる群れには属していない。海流に乗った卵が、海洋学者ロザリア・ゴメス博士の水質調査用の仕掛けに引っ掛かったのだ。以後、育ての親である博士とこの離島で2人暮らしをしていた。1週間前まで。

やましたとあこ
山下透子は人間の女性体、享年32才。結婚はしていないが時流など関係ない安定した企業に属していた。甥っ子と2人暮らしをしていた、のだが…。さて、どれだけ前のことか。

アレイスタは今朝方、自分にもう一人分の記憶があることを知っ

た。

記憶の中で、自分は山下透子だった。性格があまり変わってないためか、記憶が増えても違和感はない。2人分の記憶はY字の様に混ざりあって、現在の彼女に続いていた。

だから、それはいい。いやよくないか？思い出した記憶に2つ問題があった。それ以外は普通の女性の記憶だ。まあよい。

問題の1つ目は、この世界が、透子のやっていたゲームそのままだということ。

問題の2つ目は、透子と甥っ子が、召喚被害者だったのではないかということである。

002 問題の1つ目は、頑張ってもムダだったってこと

さて、問題の1つ目について言及したい。

問題の1つ目は、この世界が、透子のやっていたゲームそのままだということ。

それが何故問題になるかと言えば、透子の設定したキャラクターと、ゲームに対する態度にある。

…もつとまともに設定しておけばよかった…！

アレイスタは魔法が苦手である。呪文は囁むし、魔法陣は間違う。どれだけ練習しても上達しない。魔力測定機では程々に高い値が出たものの、博士からは「なんていうか…人には向き不向きがあるから、落ち込むのではありませんよ」と生暖かい視線を向けられた。

ならばと努力した武器の扱いはどうかと言えば、こちらもさほど上手くない。アレイスタは体格にあまり恵まれていないため、当たっても威力が見込めない。では手数を増やせるかというと、普通に60代の博士に負ける。

博士は「私もさほど得意じゃないけど、人よりちょっとはマシよ」と苦笑を漏らしていた。

つまり、彼女はどれだけ頑張っても、魔法も武器も普通に届くか届かないかといったところ。座学、特に理数科目は博士も訝しむ優秀さであったのに、この事実は彼女のプライドを傷つけた。自分の不甲斐なさに枕を濡らした夜も、1度や2度でない。

そして、現在の彼女は、設定したアバターの容姿を持っている。赤銅色の髪に碧眼というクリスマスカラーな配色。見かけ上ハイティーンな身体。おそらく能力もゲームに準じたものだろう。投げ出した当時の。

上達しない道理である。

透子は、アレイスタを、魔法にも武器にも特化させなかった。

透子がアレイスタに設定した特徴は、魔法でも武器でもない。

「魅力」である。

そもそも、透子にはゲームをやる習慣がない。

今回は、甥っ子にねだられたから付き合っただけというのが正しい。クリスマスに携帯型ハードにソフトと周辺機器を2人分買った時は総額に少し気が遠くなったが、まあ親類縁者がいなくてお年玉を見込めないのだからたまには、と奮発した。透子は甥っ子に甘い。

甥っ子が欲しがったゲームは、透子は知らないがいわゆるMMORPG（多人数参加型オンラインRPG）の一種だった。剣と魔法の世界。そこでモンスターを退治したり仲間に行ったり戦争をしたり、さらには猟師になったり教師になったりと、喧嘩したり生活したりするのだ。政治家や官僚、外交官といった国に雇われるような難しい職はないが、かなり自由に活動できる。また、キャラクターのバッテリーや能力値、操作性の設定などについて、かなり自由度が高かった。自由度が高い分難易度も高い。それがこのゲームの魅力であ

る…。

と、透子は甥っ子に聞いた。細かいことはわからない。世界中で何億人が遊んでようと、透子は受けとった甥っ子が喜べばそれでいいのだ。

初心者をあまり意識しない作りなのだろう。キャラクターのステータスやアバターも甥っ子に大分助けられながら設定したのだ。しかも、甥っ子の助言を聞き流しつつ。

- 魚人にするの？

- うん、魅力を高めればボコさず仲間に出来るみたいだから。魚人が1番魅力高いからさ、むんむんなねーちゃんにするの。

- 攻撃手段もあつた方がいいんじゃない？
魔法が使える様に、もうちょっとこっちに割り振らないと。

- んー、魔法じゃなくて、これがいいな。
二刀流。

- …とー、魚人は前衛には向かないよ。

- いいの。

ちまちまやるのは趣味じゃないから、とにかく剣でぶっこむから！

- …僕、剣士にしちゃったけど。
一緒にやるならバランス悪くない？

- 2人で突っ込めばいいじゃん。

- …早く転職するから。
それまで待ってて。

- ？うん。

あ、ひーちゃん、もっと、こう、エロい感じで！

- とーはこんなもんだよ。

- なんだとう！？

…ああ、ひーちゃん、なんでもっと止めてくれなかったの…！

もつと適正に合わせて設定すればよかったと後悔しても後の祭り。
種族特性無視なアレイスタが出来上がった。

どれだけ頑張っても上達しない訳である。

そんな感じで始めたゲームだったが、透子はまだゲームにのめり込まなかった。

なにしろ、自由度が高い分、難易度も高い。チュートリアルさえ
てこずった彼女は、途中から完全に放置していた。ゲームのタイト
ルさえあやふやである。

たしか、レベルを上げると転職が可能で、カンストすると転生し
てレベル上限が増える、んだっけ。いくつだったかな？と、臆げに
しか覚えていない。なにしろ、透子には遠い世界だった。

それでも、甥っ子の手前、じわじわとオフラインでクエストをこなそうと頑張り、レベルが上がるたび与えられるボーナスポイントを「魅力」絡みのスキルに割り振り。

ようやく、スキル「美しければそれでいい」から、スキル「美しさは罪」に成長させたところだった、のだが。

…こんなことになるかわかっていれば、もっと役立つスキルにしておいたのに。

後悔先に立たず。

アレイスタは、その言葉をしみじみと噛み締めた。

003 問題の2つ目は、どこに行ったかわかんないこと

次に、問題の2つ目について。

問題の2つ目は、ひょっとして透子と甥っ子が、召喚被害者だったのではないかと思いつたことである。

なぜそう思ったかといえば、透子であるところの自分の最期…なんというか、そう考えると微妙な気分を味わうのだが…が、昔観た映画を思い起こさせるからだ。

オズの魔法使い。

忘れもしないと言いたいが、きれいさっぱり忘れていた、あの日。5月のゴールデンウィーク明け。参観会の日であった。

甥っ子は隠そうとしていたが、透子はすでに仕事を調整し、年休を取得していた。ママ友メーリングリスト侮るなかれ。両親がいない今、彼の参観会に参加するのは、透子の義務であり権利なのだ。外で保護者と居たがらなくなった甥っ子を宥めすかし、父兄会の後、一緒に帰る約束をした。

帰り道。

靴を履き急いで出て行くと、甥っ子は友達グループと校庭で遊んでいた。透子に気付いたのか、別れを告げてこちらに寄ってくる。が、透子の顔を見て、少し顔をしかめた。手を繋ごうとしたらしれつと無視された。ああ、子供の成長とは切ないものだ。

しばらく無言で歩いていたのだが、甥っ子は我慢出来なくなった

のか、斜め後ろに行く透子に話しかけた。

- …何にやにやしてるの。

- にやにやなんて。

ね、外では、オレって言ってるの？

- …

- もー、悪ぶっちゃって、カ・ワ・イ・イ！

- うっざ…

吐き捨てた後に速度を上げた甥っ子に、おいて行かれまいと慌てて追い縋る。

- おおう、ひーちゃん。

ちよつと待ってよ。

大丈夫、理解してるよ。

ワルぶりたいお年頃だよね！

親指を立てた透子に、甥っ子の冷たい視線が刺さる。

- マジウザい。

それに外では呼ぶなっつったじゃん。

- ひーちゃ……！？

- だからその…？

！！

透子は、話してる途中で気が付いた。そして固まった。人間、信じがたいものを見ると、頭が真っ白になる。

蛇行するトラック。所々で人や自転車を引っ掛けて、こちらに向かってくる。

視界の隅で、振り返った甥っ子が、透子の顔を見て同じ方向を向き、やはり動きを止めた。

その甥っ子を見て、透子は縛りが解けた。慌てて、彼との距離を詰める。

その時には、もうトラックは目の前だった。

とっさに目の前の甥っ子突き飛ばそうとしたら、なんと、彼は驚きの反射神経で透子の延ばした腕を掴んだ。そのまま投げ出され、透子は甥っ子の横を摺り抜けた。

一瞬なにが起きたか分からなかった透子は、心の中で悲鳴を上げる。

…なんで大人しくしてないの、ひーちゃん!!

交差する瞬間の甥っ子の顔は見えなかった。
後ろに迫る大きなトラックの陰は、よく見えたのだけれども。

- ひーちゃん!! -

透子は甥っ子の名前を叫んだ。転倒時に地面についた手のひらと腕、顔、足に、コンクリートで擦った痛みが走ったが、意識の外だった。

転倒した体を急ぎ起こした透子は、目を見張った。

鈍い音を立て、トラックがふつとんだ。

スローモーションの様に落ちていくトラックを、呆氣にとられて見送る。地面に叩きつけられ、轟音をあげた。火を吹いた。

驚いて反射的に目をつぶって首を竦めた。熱風が横切っていく。ゆっくりと目を開ければ、そこに先程までの驚異が見える。

何が起こったかイマイチ理解できなかったが、頭を振って切り替える。危機が去って、甥っ子に怪我がなければそれでいい。

と、首を巡らせようとした刹那、息を呑む音が聞こえた。

-...ッ!!

よく見れば、甥っ子を中心に、つむじ風が起きている。風が巻き込んだのか、甥っ子の左手の甲から鮮血が溢れた。押さえた右手から零れた血が、つむじ風にまかれて螺旋を描くのを見て、透子が悲鳴じみた声をあげた。

- ひーちゃん!!

-...ばかッ、とー、止めろ!!

透子は、甥っ子の制止を無視し、つむじ風に跳びこんだ。体中を引き裂く痛みを無視し、甥っ子を抱え込む。

その直後に、全身に衝撃が来た。目の前が真っ暗になった。

最期は、多分、どこかの室内だった。

重い瞼を長い時間かけて無理矢理こじ開けたら、白茶けた四角い間口から人影のような揺らぎが見えた。

だから、必死に甥っ子を頼んだ。身体がひたすら重くて鈍くて、声となっていたかは分からないが。

「ドロシーは、帰ったよね？」

甥っ子は、無事だったろうか。

透子の家族は、怪我などしなかったか。

ここにはいないかもしれないが、じっとしていることもできない。

だって、たった一人の家族だったのだから。

004 お客さんが来ます

アレイスタは黙々と荷作りをしていた。少し苛立ちながら。

思い立った…ではなく、思い出した吉日。今日はこの島に人が来る予定だったので、帰りの船に同乗させてもらえばいい。元から博士の遺言に従って島を出るつもりだったので、少し速まったといえ、片付けも済んでいてちょうどよい。

苛立っているのは、片付けについてではない。この世界の仕様のためだ。

トランクにパンツをつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「履き古したパンツ」を収納しました】

トランクに上着をつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「着古した上着」を収納しました】

トランクに歯磨きをつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「使い古した歯磨き」を収納しました】

「…ウザ…！」

いままでは、「こういうもの」として気にしたことがなかったが、透子の生活を思い出した後だ。何をしても流れていく文字が、ちらちらと視界を狭める。これが実に鬱陶しい。自分の状態を把握出来るようになれば、これを流れないようにもできる、と博士が言っていたが、早くそうになりたいものだ。

と、視界の隅に黒い影。

「…ッ逃がすか！」

すかさずスリッパを構えたアレイスタは、その影を捕らえた。すぱーん、と景気がいい音が響く。

視界の隅で文字が踊る。

【ゴキブリを仕留めました】

【仕留めたゴキブリの通算が50匹になりました】

【称号「ゴキブリ・ハンター油虫の狩人」を取得しました】

【スキル「スリッパ早打ち」を取得しました】

「…要らねえ…！」

アレイスタの呻き声が室内に響いた。

余談だが、彼女は100匹蠅を退治した人間が取得する称号、「フライ・キラー蠅の殺戮者」も持っている。スキル「蠅叩き早打ち」はレベル2だ。

双剣技の取得スキルには、レベル2に達したものはない。

住居のある離島、大地母神の枝毛……ふざけた名前だといつも思うのだが……は、つい先日まで博士とアレイスタしかいなかった。今はアレイスタだけだ。なので、最寄の大きな島にある雑貨屋から、生活用品が届く。

届けてくれるのは、漁師のレネ爺さんだ。この島には彼の船以外は来たことがない。付近の海流が複雑なので、慣れない者では潮の流れが読めないのだ。

アレイスタは今まで島から出たことがないので、会ったことがあるのは4人だけ。一緒に暮らしていた博士、たまにくるレネ爺さん、1度訪れたゴメス家顧問弁護士のサー・ウォルターと雑貨屋のミス・リップ。全員人間だ。

今日は、レネ爺さんが、サー・ウォルターとミス・リップ、それに後3人を案内して来る。アレイスタが生活し始めてから、1番多い人間を見ることになる予定だ。

博士の葬儀と遺言の開示のため。

もう昼だから、そろそろ着替えた方がよさそうだ。昼の準備も必要だろう。

アレイスタは素早く身支度を整えると、昼の軽食を準備するために台所へ降りた。

005 サー・エセルバート・ゴメス

サー・エセルバート・ゴメスは親切な男だ。

…ありがたいはありがたいけど…。

自分の対面に座る優雅な男をちらりと伺うと、ばつちり目が合った。どうやら、こちらをずっと見ていたらしい。にこりと笑う男に引き攣りながらも笑みを返し、アレイスタは内心ため息をついた。狭い馬車の中、視線で息が詰まりそうだった。

博士が亡くなった後すぐに、アレイスタはサー・ウォルターに連絡をとった。サー・ウォルターからは、博士の弟であるサー・リチャード・ゴメスと、その次男たるサー・エセルバート・ゴメス、それに司祭と連れ立って島に行く旨書かれた手紙を受けとった。博士の希望通りに亡きがらを葬るためだ。遺言状の立会人であったレネ爺さんとミス・リップには、アレイスタからお願いをした。

手紙を受け取ったアレイスタは、少なからず覚悟をしていた。義叔父と義従兄にとって、自分は招かざる客だろう。今時分継子いじめもあるまいが、博士の厚意がよくない結果を招くかもしれない。

結果として、それは完全な杞憂に終わった。

レネ爺さんの船から降りてきた彼らは、非常に紳士的だった。

義叔父のサー・リチャードは、撫で付けられた色の薄い金髪に青灰色の目、彫りの深い顔に高い鼻といった、姉たる博士と似た風貌

で、男振りもよかった。しかし、痩せ型だった博士に対して、彼は体格に恵まれていた。物腰も雰囲気も柔らかく、博士が峻厳たる冬の海をなら、サー・リチャードは春の温かさがあった。

対して、義従兄のサー・エセルバートは、初めのうち、完全に一線を引いていた。彼も父親と同じく穏やかな雰囲気をまとっていたが、初対面特有の見えない壁の向こうにいた。時折、視線を感じて顔を上げれば、ずっと顔を逸らす彼が見えたので、警戒されていたのかもしれない。

ただ、ミス・リップは船の中で彼を気に入ったらしく、あれこれと話しかけていた。その対応から見て、悪い人物ではなさそうだとアレスタは判断した。特に言葉をかわすことはなかったが、葬儀後に家に招いた時には、視線が合っても顔を逸らされることもなかった。なので、短い時間だったが無害と伝わったのだろう。

二人が穏やかな人物だったので、軽食を勧めたテーブルでは、和やかな雰囲気で故人の話題を持てた。サー・リチャードが知る博士は、アレスタやレネ爺さん、ミス・リップが知る彼女とは異なる。博士が幼い頃の話聞き、ここで生活していた時の話をした。彼女について一番網羅的に知っていたのはサー・ウォルターだったが、彼は自分から話すことはなく、嬉しそうに相槌を打っていた。故人を直接知らない司祭とサー・エセルバートは聞き役だったが、気まずさを感じさせるようなことはなかった。

思えば、皆さんが帰られるという頃、そういえば帰りに同乗させてもらえないか、とお願いしたことが発端だった。

「お嬢ちゃん、ここを離れるのかい？」

「危なくないかい？」

顔に、心配、と貼付けて、レネ爺さんとミス・リップが言った。

「はい、博士に同胞を捜す様に言われています。
今から暖かい季節になりますから」

「…貴女が一人で？」

その低い声に驚いて、アレイスタは動きを止めた。見れば、ほかもぴたりと口をつぐみ、驚きに目を軽く見開いている。

その声を発したのは、それまで穏やかな笑顔で話を聞いていたサー・エセルバートだった。笑顔のままだったのに、不思議なことに恫喝されているような気分になる。

「はい。その予定ですが…？」

多数種族が入り乱れるこの世界では、種族ごとに成長速度も寿命も違う。そのため成人は、基本教育が完了していることと、第二次性徴が現れたこと、の2つの条件を満たした段階でなされたと考えるのが普通である。

アレイスタは孵化して6年になるが、彼女は条件を満たしているため、成人だ。1人で旅をしていてもそんなにおかしいことでもない。人態の外見もハイティーンだ。

首を傾げながら、はて一体彼は何が気に入らないんだろうと問えば、声がより低くなった。笑顔のままなので怖い。

「…女性一人で行かれるつもりだと？」

「ええと…」

他人を雇えるほど金もないし、他にいないのだから仕方ない。博士の遺産をいただいたが、それを使う気はなかった。

「でも、これもありますから」

そう示したのは、博士の形見の懐中時計。さきほど、彼女の所有として登録されたものだ。実は身を守るための魔道具だと聞いて断ったのだが…

「貴女は先ほど、剣も魔法もあまり得意でないとおっしゃっていただけでしょう？」

身を守る手段はたくさんあったほうがいい。

邪魔になるものでもないですから、取っておいて下さい。

…と、サー・リチャードに笑顔で押し切られた。

懐中時計を見た後、少し考えたサー・エセルバートは、にっこりと笑って言った。

「では、身を隠すための魔道具を準備しましょう。
女性一人だと危ないですから」

「え、いえ、その、そういったものを準備するお金は…」

「こちらで準備しますよ、従妹殿」

「そんな高価なものを準備していただくわけには」

「貴女は先ほど、剣も魔法もあまり得意でないとおっしゃっていたでしょう？」

身を守る手段はたくさんあったほうがいい。

邪魔になるものでもないですから、取っておいて下さい」

…あれ、どこかで聞いた台詞だなとアレイスタは思った。

「いえ、でも」

「邪魔になるものでもないですから、取っておいて下さい」

断ろうとしたのだが、重ねて言われる。笑顔が怖い。

「まあまあ嬢ちゃん、せっかくだからもらっておきなよ」

「なあ、せっかくだんながこう言ってくださってるんだ」

「女性ひとりは危ないですからね」

「こういった準備はしすぎることはないですよ」

「息子の言つとおりですね」

周りを味方につけられて笑顔で押し切られ、結局断れなかったところも一緒だった。さすが親子だ、よく似ている。

エセルバート卿は、何でこんなに親切なんだ。

その後、レネ爺さんの船の人数制限に引っかかると聞いたアレイスタが、荷物だけ載せてもらえれば泳いで行くと言ったら、また怒られた。

その後、レネ爺さんの船の人数制限に引っかかると聞いたアレイスタが、荷物だけ載せてもらえれば泳いで行くと言ったら、また怒られた。

「ええと、では歩いていきます」

魚たちはアレイスタに親切だ。それこそ、皿を持って立てば、集まって先を争い勝手に皿に飛び乗ってくるほど。言葉がわかるので、食べる気は起きなし、正直、その気遣いが重いので勘弁してほしいと思ってるが、頼めば上を歩くくらい余裕だろう。バランス感覚は必要とされそうだけれども。

と、伝えたのだが。

「私と一緒に待っていきましょうか」

「いえ、そんな手間ですし。」

私は魚人族なので…」

別に濡れるとか気にしない、と言いたかったのだが。

「私と一緒に待っていきましょう」

あれ、上から被された。

「俺はそれでいいぜ、嬢ちゃん。」

大した手間でもないしなあ」

「せっかくだから甘えたらどうだい？

一人で待ってるのもアレだしねえ」

さつきもこの展開だった気がする、と思ったが、結局アレイスタは彼と二人でレネ爺さんを待つことになった。

別れ際、なんだか妙に可笑しそうな顔をしたサー・リチャードと目が合ったと思ったら、彼は片目をつぶって見せた。

「まあ、そんなに困った顔をしないでください。」

私もあの子と同じく、貴女をとて好ましく感じています。

こちらに来ていただけなのは残念です。
機会があればぜひお立ち寄りください」

歓迎はされそうだが、面倒なことになりそうだな、と思いながら
返事をした。

しかも、気づけば王都に向かう馬車の中、向かいあって座っている。

確か、「王都には腕のいい魔道具が集まるんですよ」と聞いたときは断ったのだが。何がどこでこうなったのだろう。…従兄怖い。そして視線が痛い。笑顔なのに痛い。

アレイスタは博士と2人暮らしで、他の人間にほとんど会った事がない。そして透子は日本人だ。人と視線を合わせるのは苦手だった。

彼は、ため息をついたアレイスタを気にせず、そのまま言葉を向けてきた。

「貴女は、叔母のことを博士と呼んでいたんですか？」

その言葉に、アレイスタは呼び方を変えた日のことを思い出していた。アレイスタと博士は義理の親子に当たる。それは、手続きが完了した日のことだった。

- - アレイスタ、私と貴女は親子ですね。

- - はい。

- - では、私のことを博士というのは少し他人行儀過ぎて不適切ですね。

別の呼び方を考えなさい。

- - 別の呼び方というと…。

- - 一般的に、母親のことは母様^{かかさま}などと呼びます。

- - …はい、母様。

- - よろしい、ターシャ。

「…いえ、母様と」

「なるほど。」

そして、貴女はなんと呼ばれていたんですか？」

「ターシャですが…」

何が言いたいのだろう、と首を傾げる。

「従妹殿、私と貴女は従兄妹同士ですね」

「はあ」

「私のことをエセルバート卿というのは少し他人行儀過ぎて不適切ですね。」

別の呼び方をお願いしたいのですが」

あれ、また何か記憶に残っているのと同じやり取りだなとアレイスタは思った。

「別の呼び方といいますと…」

「私は、親しい人にはエセルの愛称で呼ばれています」

なんというか、この難儀な性格はゴメス家のものなのだろうか。あまり、博士に押しの強さを感じたことはなかったアレイスタは、顔を引きつらせた。

「あの、私は」

まだ親しくはないのですが、と言いたかったのだが。

「エセルの愛称で呼ばれています」

あれ、また被された。

「…はい、エセルさま」

「よろしい、ターシャ」

サー・エセルバート・ゴメスは親切的な男だ。多分。

そして、押しが強い。

その親切さと押しの強さに、アレイスタはドン引きである。

006 奇襲を受けました

「大地母神の枝毛」島から、王都ロルーへ至るには、大陸の最寄の漁村へ船で1時間、漁村から馬車で州都へ1日半、州都から転送陣で一瞬、といった道行になる。漁村からの馬車は、サー・エセルバートが待たせていたものを利用した。サー・リチャードとサー・ウォルターは二人ともゴメス家領ホルスコから来たため、漁村からそちらに道が分かれている。

サー・エセルバートが事前に転送陣の利用申請をして予約を取っていたので、最短時間で王都に着くことができた。途中の息苦しさを思い出し、アレイスタはほっと息をついた。

アレイスタは博士以外の人間と親しくしたこともなく、透子はモンゴロイド以外になじみがない。だから、外人男と間近に接しているのはしんどかった。なによりでかい。分厚く筋肉がついているというわけではなさそうだったが、骨格が違うのか圧迫感が半端ない。笑顔を向けられているとはいえ、いやだからこそ、余計に怖かった。とにかく着いてよかった。

ちなみに、道中の車中泊はアレイスタだけで、サー・エセルバートは御者とともに野営した。このときほど彼が紳士でよかったと思つたことはない。一時的に圧迫感から開放され、本当によかったしみじみ思つた。

それに、なんだかんだ言いくるめられて、結局魔道具の通信石を渡され、2日に1回は彼に現況を報告することになってしまった。また長く付き合うと何かしら押し通されそうで怖い。

転送陣のあった大きな建物は、比較的多くの人がいたようだ。出れば、陣の利用客目当ての辻馬車を多く見た。

初めて見た王都は、州都よりさらに大きかった。漁村と変わらず焼煉瓦で出来ているものがほとんど、大きめな建物は石造り。2階建て以上の建物も多い。

透子が透子のままで初めて見たら、異国情緒漂うその光景に感嘆の声を上げただろう。が、アレイスタが住んでいた家も似たり寄ったりな作りだった。

アレイスタがアレイスタのままで初めて見たら、人の多さに驚いただろう。が、透子が住んでいた東京ほど人が多くも大きくもなかった。多分、総人口も全然違うのだろう。

そして、透子であるアレイスタはそのことに気づいて、なんとなく損をした気分になった。とはいえ、多民族入り乱れる通行人は、一見の価値があったが。

2人分の荷物を持った――断ったがやはり断り切れなかった――サー・エセルバートが捕まえた辻馬車に乗り込んだ。御者への指示を聞けば、王都の内郭に向かうようだった。

アレイスタがいる間は一緒に宿をとると言っていたので――こちらもやはり断ったのだが――そちらで宿を探すのだろう。彼は王都に就職先から斡旋された住居があるとのことだったが、そちらは関係者以外立ち入り禁止らしい。

彼が選んだ宿は、上品だが気さくな雰囲気だった。サー・エセルバートが手続きをしている最中、ホテルというよりは民宿かなあと

あ。これはやばいかも、と思ったところで。

「ターシャ!？」

「…！」

お、お客様！申し訳ありません！
大丈夫ですか!？」

助かった。

ほっと息を吐いたところで、視界の隅で文字が踊るのが見えた。
が、それは気づいたときには消えてしまって、読み取れなかった。

なんとか犬と猫を引き剥がし、借りた部屋に移動した。まったく
はがれようとしない彼らは、頼めば離れてくれた。むしろ、すみま
せんすみませんと謝り続ける宿の人の方が、扱いに困った。おかげ
で宿代が安くなった。

…何が彼らをそこまで駆り立てたのか…。

よだれまみれになったアレイスタは深く部屋のソファに座り込み、
ため息をついた。

「大丈夫ですか？」

「…なんとか」

どうぞ、とサー・エセルバートが、茶を入れてくれた。まめな男

である。アレイスタはありがたくそれを受け取った。

007 街歩きの罫

「今後の予定について、少し見直しませんか」

ソファで一息ついたところで、向かいに腰を下ろしていたサー・エセルバートが声をかけてきた。

当初馬車の中で相談していた予定は、こうだ。

- 1・魔道具を購入する。もしくは製作を依頼する。
- 2・魔道具が手に入るのを待っている間に、
 - 2・1・情報提供依頼を出す。
 - 2・2・旅の準備をする。
- 3・魔道具を受け取ってから旅に出る。

「見直しというと……」

転送陣の利用も、辻馬車の利用でも、特に時間をとられていない。今は昼さがりで外出を見送る時間でもない。

さて、どこを見直す必要があるだろうと首を傾げ、自分の格好に気づいた。

アレイスタは、一昨日から同じものを着ている。首まで覆う黒のドレスに、顔を覆う黒いレースのついた帽子。そう、彼女は喪服のままだった。移動には適さないので着替えようとしたのだが、このままewith押し切られてしまった。サー・エセルバートは着替えたくせに。

それが、犬猫に揉まれて毛まみれ、よだれでぐちゃぐちゃだ。なんか妙なおいもする。宿の従業員が洗濯屋に出してくれると言っ

てくれていたから、着替えてお願いすればいい。

「すみません、着替えますので、少し待っていていただけますか」
「いえ。そうではなく…」
服を新調しませんか」

「…？」
なぜ…？」

洗えばきれいになるはずだ。それに、他にも服は持ってきている。

「気分を悪くしたら申し訳ありませんが、貴女はあまり外に顔を出さない方がいいでしょう。」

他に顔を隠せるようなものがあればいいのですが…」

隠せば少しはマシでしょう、そう言っただけでアレイスタの方を伺う様なまなざしを向けてきたので、彼女は首を横に振った。

そもそも、なんで顔を出したら不味いんだろう？

怪訝な顔をしていたのがわかったのか、彼は少し言いよんだ。

「貴女は魅力の力が強すぎます。」

危ないかもしれないので、あまり顔を出さない方がいいかと」

「…？」

よく分からないのですが…」

透子は、もちろんそれを知っている。そういう風に『アレイスタ』を作ったのだ。しかし、それで街中で問題が起きるようなことはなかった。フィールドであっても、ほとんど力にはならなかった。どれだけ、魔法が剣かに偏らせて作ればよかったと後悔したことか。

敵を倒してから仲間にすることができるとわかってからは、特に。

「私は、スキル「力量把握」を持っています。

あなたは、自分のステータスを確認できますか？」

「いえ、まだ……」

そうですか、と頷いたサー・エセルバートは、貴女の魅力の値は、少しありえないくらい高いんですよ、と苦笑した。

「そのままだと問題が起きやすいのではと案じています。

先ほどのように、犬猫だけで済めばいいのですが」

「……」

魅力は、いわゆる『敵』、モンスターにしか影響を及ぼさないはずだ。ましてや街中でなど。ステータスは、戦闘行動の出来るフィールドでしか効果がないものだ。村人に攻撃できないのと同じである。

「服を買うだけなら、大して時間はかかりませんよ。
魔道具ができるまでの間でしょうし」

何かあつたら危ないでしょう？

につこりと笑われて、アレイスタは、頷いた。反対するほどのことでもないというのもあるが、この笑顔を見ると勝てる気がしなくなってきたのだ。

ナンパ2回、養女にならないかとの誘い3回、人買いによる誘拐未遂1回、迷子に懐かれること1回、荷物引きの口バに甘噛みされること1回。

服屋や雑貨屋が軒を連ねる界隈に着いたところには、アレイスタもなんとなく事態を理解した。どうやら、魅力ステータスは街中でも影響を及ぼすらしい。というか、町だからとか、そういうのは関係ないのかもしれない。リアルだとしたら当然か、とアレイスタは納得した。普段着に着替えたとはいえ、ちぐはぐながら顔を隠すために喪服の帽子はかぶったままだったのだけれども、30分弱で着くと聞いていた道程に1時間ちよつとかかった。

ちなみに、誘拐犯は、離してくださいとお願いしたら離してくれた。いい人で助かった。

もつとも、途中でサー・エセルバートが走っている馬車に乗り込んできたのが怖かったのかもしれない。正直、アレイスタも怖かった。なまはげかと思った。

古着屋で適当に買った頭巾^{フード}つきシヨールを巻いて深くかぶり、かつシヨールの襟元を引き上げて、アレイスタは頭を下げた。

「…ご迷惑をおかけして、すみませんでした」
「いえ、何事もなくてよかったです」

すつと出された腕につかまった。浚われたあたりで、危ないからと腕を組むことになったのだ。断ったが無言の圧力に屈したアレイスタは、体格の違いから抱っこちゃん人形を思い出して情けない気分を味わった。

「魔道具を商っているような商店は、またちょっと離れた場所にありますから」

そう説明しながら通りで辻馬車を捕まえたサー・エセルバートに続いて、アレイスタも馬車に乗り込んだ。

閑話001 サー・エセルバートの場合（前書き）

主人公格周りの人々の視点でお送りします。

閑話001 サー・エセルバートの場合

その一。

サー・エセルバート・ゴメスことエセルバート・ゴメス・北征勲爵ナイト・コンクエスト・ザ・士プリンスあるいはグラント・キャプテン（勇敢なる大尉）・エセルバート・ゴメス。親からいただいた爵位と名前を格式ばって言うならば、エセルバート・ルイス・アカーテース・セツ・ゴメス・ローウェル^{II}トウーロ（トウーロ子爵エセルバート・ゴメス・ローウェル）（1）という、長い名前を持つ男の心情に関する話。

美しいが、絶世の美女というわけではない。成熟した女性が好まれるエルゲントス王国では、基準から外れるだろう。

顔立ちは整っていたが、その表情には憂いや妖艶さといったものとは無縁で、愚直な幼さが残っていた。どちらかというと凛々しい印象を与える。緑色の目だけは文句なしに美しかったが。

赤銅色の髪は短めで、礼儀にしたがって（2）伸ばされたのは襟足のみ。それもおおざっぱにまとめてあった。

すんなりとした手足に、ささやかなながら丸みを帯びはじめた未発達な身体。あるいは、魚人族の女性はそういった体型のものなのかもしれない。

エセルバート・ゴメスには、特にこれといった性癖はない。ごく一般的な基準で美しい女を好んだ。

つまり、アレイスタは彼の好みから外れていたのだ。彼に少女趣味はない。

…少なくとも、外れていたはずだった。

初めて会った義理の従妹とは、なかなか気持ちがい距離を保っていた。

幼さが残っているせいか、年頃の女性特有の押し付けがましさも自意識過剰さもまだなく、かといって頭の回転は悪くない。弱腰なところはきになるし、緊張感をもって恋愛を楽しむ相手としては足りなかったが、気楽な会話を楽しむ相手としてはちょうどよかった。

しかし、それは馬車に乗っている間の話だ。

街を歩いていてふと横を見れば、彼女がしばしば姿を消していた。急ぎ振り返れば、そのたびに何かしら巻き込まれている彼女にいい加減呆れた。そのたびに彼女はぺこぺこ謝ってきたが、世間知らずにもほどがある。

彼女が男に声をかけられたのを見て、不愉快に感じた自分がいた。大体、少女のような姿形のものに何を考えているのだろうか。肩を抱いて彼女を引き寄せたら男は慌てて去っていったが、肩の小ささに驚くと同時に、危機感のなさに少し腹が立った。

伯母の家では少女がひとりで、と魔道具を持たせることを主張したが、そうしておいてよかったと思った。

だが、さすがに馬車に押し込まれているのを見つけたときは、洒落にならないと血の気がひいた。

とつさに体が動いた。能力を隠すこともせず走って馬車の後ろに飛び乗り、強引に扉をこじ開けて入り込んだ。飛んでいった扉に驚いた民衆がいたようだが、知ったことではない。

車内には3人が乗り込んでいた。強引にアレスタを持ち上げて押し込んでいたところを見ると、少なくとも1人は力自慢の獣人だろう。

急に馬車に入り込んだエセルバートにひどく驚いたようだったが、反応は早かった。全員一斉に懷から銃を抜いた。

が、エセルバートの方が早かった。

2人は抜いた銃ごと腕を壁に縫いとめ、1拍遅れてもう1人を足で対面の扉に縫いとめた。スラックスの下には、鉄骨の入っている軍用ブーツを履いていたせいで、ぎしりと扉がきしむ。

「っかはッ…」

最後1人は、足を使って首ごと縫いとめたせいで、呼吸が厳しいようだった。が、この程度で死ぬこともないだろう。

喉がつぶれたとしても、エセルバートが気にするようなことでもない。

少し動いたせいで、上げていた髪が乱れて一筋落ちてきた。首を振って目から払い、顔を上げればアレイスタと目があった。怯えさせないようににこりと笑ったら、はじかれたようにびくりと肩を揺らした。

ああ、怯えさせたか…（ 3 ）

内心ため息をついたが、外に出すようなマネはしない。笑顔のまま問いかけた。

「大丈夫ですか？」

「あ…、は、い…？」

「ありがとうございます…」

顔が青ざめている。が、彼女はベールの奥の目をそらしたりはしなかった。

と、ずるずると背もたれから落ちた彼女が笑い始めたので、箍がはずれたのかとぎょっとした。すべり落ちたため、帽子が彼女からズレて、顔がさらされる。

「え、ちょ、大丈夫ですか…！？」

「…は、はは、はははははは……助かったあ……」

ひとしきり笑った後、彼女はへによりと笑った。どうしたらいいのかと内心うろたえていたサー・エセルバートは、その半泣きの情けない笑顔に固まった。

「あの、本当にありがとうございます」

再度礼を言って彼女がにっこりと笑った。エセル様はいつでも笑顔なんですね、そう言って苦笑した彼女に、

瞬間、一瞬頭が真っ白になった気がした。

そして、これはまずいと思った。

まずい、とてもまずい。

落ちかける感覚にぞくりとしたが、それを表に出すほど子供でもない。笑顔を保ったまま、それはよかったと返事をする。

さて、彼女が落ち着いたのであれば、拘束している彼らをまとめて片付けて、御者の男も何とかしなければならぬ。視線を移せば、男たちは彼女の笑顔に晒されて、恍惚とした表情を浮かべている。なんととはなし面白くなって、わずかに力を強めた。

めきりと骨がきしむ感触が伝わってくる。

痛みで我に返ったらしい男たちが、恐怖で引きつった顔を向けてきた。

「……！」

黒の……！？」

気づいたららしい男が何か言いかけたが、そちらに視線を向けただけで黙り込んだ。顔色が青い。カタカタと振るえはじめたのが伝わってきた。すでに緊張が取れたらしいアレスタが、よくわかっていない顔をして首をかしげている。

「……？」

ええと、私、帰りたいのですが、いいでしょうか？」

彼女の提案は震える男たちには、天の助けだったろう。大きく頷く男たちに、どうも、と返し、行きませんかと笑顔に向けてくる彼女の気楽さのため息がこぼれそうになる。と、同時に、馬鹿らしくなった。

「行きましょうか」

そう返したサー・エセルバートの笑顔に、アレスタがおやという顔をした。

彼は気づかなかったが、多分それは、アレスタに向けた中で、はじめての自然な笑顔だった。

（１）彼はローウェル女伯爵の息子であるので、成人時に彼女が持っていたトゥーロ子爵位を受け継いだ。そのため、それに対しての呼びかけをするならばロードとなる。ただ、本人は自己紹介時にサーとしか名乗っておらず、士爵以外の爵位を持っていることをアレスタに伝えていない（まあ知っているが、彼女も言及する性格でもない）。

（２）女性は髪を長く伸ばし、ゆったりと結うのが主流。髪が短く、かつそれを晒している女性は、犯罪者として刑罰を受けたものと見られた。

（３）動き云々より、こんな場面でも笑顔のエセルバートが怖かった。

彼にもし心の声が聞こえていたら、

…ここでも笑顔かよ、超怖エ！

悪い子じゃないので許してください！

というアレイスタの心の悲鳴が聞こえていたはず。

008 魔道具店の3職人

サー・エセルバートに案内された店は、一見の価値のあるものだった。磨かれた飴色の木材は細かな細工を施され、元の枝を生かして波のように広がる形は優美な曲線を描いていた。間の硝子で屋内が透けて見える。

それは美術品に似て、アレイスタにアンティークの戸棚を思い起こさせた。石と煉瓦が主な町並みに合って、その木造建築は不思議な調和を見せている。

街路からわずかに間が空いて立てられており、1階に上がるための階段と、地下に降りるための階段が、それぞれ伸びていた。こちらの手すりも描く曲線が美しい。

見上げていたアレイスタを促して、サー・エセルバートは街路から伸びる階段を上がった。察するに、1階が店舗、地下は工房なのだろう。

コロン、と来客を知らせるベルが鳴った。ドアとのつながり目から知らないこれも、優しい音色から判断して木製なのだろうか、とアレイスタは感心した。見事なものだ。

頭を垂れて出迎えてくれた栗色の髪の女性につられて、アレイスタは軽く会釈した。サー・エセルバートのように鷹揚に挨拶を返すような文化は、彼女も透子も持ち合わせていなかった。

「いらつしゃいませ。」

お待ちしておりました、エセルバート卿。

はじめまして、新しいお客様」

にこりと笑顔を返してくれた女性からは、げっ歯類のような歯がわずかに覗いて見えた。愛嬌があって可愛い。

たいていの獣人は、人態をとつてもどこかに獣相が残るものだ。匂いからしてヒトではなさそうなので――魚人は、目は悪いが鼻はいい――彼女は栗鼠人かもしれない。

ヒト科ヒト族ヒト亜族獣人属栗鼠。もともと、獣人の血を濃く引いた、前歯が突出しているだけの女性かもしれないが。

ちなみにアレイスタはヒト科ヒト族ヒト亜族獣人属魚となる。通称魚人。残っている獣相は、手足の指の間に残る1センチばかりの水かき。おかげで手袋は直しが必要になる。

「本日は新しい依頼者をご紹介いただき、その方が新しい魔道具を作成されるということでしたよかったでしょう。

魔道具については、工房で職人たちと相談され、どういったものにするか決定されるのがよいかと思うのですが、いかがでしょう」「はい、よろしく願います」

サー・エセルバートが支払うと言っていたので、彼が依頼者かと思っていたのだが、どうやら違う紹介がされていたらしい。

紹介者であるサー・エセルバートの顔をうかがうと問題ないとはかりにうなずいていたので、おとなしく返事をした。もし支払えと言われたら足りるかなと不安になる。

どうぞこちらへ、と女性に案内され階段を降りていく。からりとドアを開けた先は、アレイスタが工房だろうと当たりをつけたとおり、数人の職人が作業をしていた。顔を上げ、客を認めると席を立つてくる。老いも若いも入り混じり、

といった雰囲気だが、席を立ったのは3人ばかりだった。

1人はサー・エセルバートと並ぶほど背が高いが、残りの2人はアレイスタの肩よりも低い。1人は胸よりさらに小さい。そのかわり、もう片方はえらくがっしりとした骨格で、幅はアレイスタよりもありそうだった。

背高さん、小柄さん、幅広さん、とアレイスタは仮に呼ぶことにした。

口火を切ったのは、幅広さんだった。えらく人懐こい雰囲気の人だ。アレイスタは彼の蓄えられた立派なひげを見て、サンタクロースを思い出した。見事な白髪に青い目がきらきら輝く。

「お久しぶりですなあ、エセルバート卿。

今日の依頼者はそちらのお嬢さんですか」

「ご無沙汰しています。

いつもすばらしい出来に感謝しています。

こちらが私の従妹のアレイスタ嬢。

今回は彼女のために魔道具を作成していただきたい」

「はじめまして、アレイスタ・ゴメスです」

フードを取って顔を見せながら挨拶をすれば、目を丸くしたサンタクロース氏が相好を崩した。後ろでは、背高さんがヒュウ、と軽く口笛のような音を出し、小柄さんも目をまん丸にして顔を見ている。魚人が珍しいのかもしれない。

差し出された手を握り返せば、もう片方の手も添えて包むように両手で握ってくれる。職人特有の硬い大きな手だった。

「こりゃあまた、綺麗なお嬢さんだ。

ワシはイムホテップ。

ホップと呼んでくだされ」

「よろしく願います、ホップさん」

挨拶は交わしたものの、ほっほっほ、といかにも好々爺といった様子のイムホテップ氏は、中々手を離そうとしない。

さてどうしよう、とにこととした相手の顔を眺めながら困惑していたところ、後ろで、背高さんが彼をつついた。

「ホップ、そろそろ変われ。

彼女も困っている」

「なんじゃ、気が短い。

寿命が長いんだからもうちつと待てい」

「お前だつて変わんないだろう、それ」

言いつつ、イムホテップはアレイスタの手を離そうとしないまま、脇をつついてくる背高さんとじゃれあいをはじめてしまった。

サー・エセルバートや案内役の女性を見れば、ちよつと肩をすくめるような動作が見れた。

どうやら、いつものことらしい。困った。

「おい、こんなところで喧嘩すんな。

客の前だぞ」

結局、仲裁してくれたのは小柄さんだった。彼が言えば、ほかの2人もさつと引いた。どうやら、ここまでが予定調和のようだ。

「ありがとうございます」

「べ、別にお前のためじゃない」

照れくさそうな彼の顔に、ああ、ツンデレってやつか、とアレイスタは思った。女の子ならともかく、おっさん（というほどの年にも見えないが）のツンデレは実に微妙な気分させられる。人間素直が一番だ。

微妙な顔をしたのがわかったのか、後ろの背高さんとイムホテップが顔を見合わせてやれやれというリアクションをしたのが見えた。どうやら、ここまですが本当の予定調和だったようだ。やれやれ。

「改めて。

ワシがイムホテップじゃ。

ホップと呼んでくれ」

改めてと言って再度手を握ったイムホテップに続き、彼を押しつけた背高さんがアレイスタの手を握った。

「はじめまして。

ステファン・スクルドです。

ステップって呼んでね」

「はじめまして、ステップさん」

こちらに片目をつぶって愛想を振りまくステフェン氏に苦笑する。よく見れば、彼の耳は葉のように長くとがっていることに、アレイスタは気がついた。サー・エセルバートよりも色が濃く、癖の強い金髪をしている。新緑の目に白い肌。

「オレはジャン・ポール」

最後に手を握ったジャン氏は、目を合わせれば恥ずかしそうにもらしてしまう。彼は、収まりが悪そうに、目と同じこげ茶の髪を帽子に押し込んでいた。

「はじめまして、」

と、アレイスタが返信をしている最中に、イムホテップとステフェン・スクルドが割り込んだ。

イムホテップが肩に、ステフェンが頭に――上背があるからちょうどいいのだろうが、されたジャン・ポールは屈辱的だろう――腕をかけている。

「こいつはジャンプって呼んでやってくれい」

「3人そろってホップ・ステップ・ジャンプさ。」

魔道具店ホップ・ステップ・ジャンプによるこそ！」

このシツクな店は、ホップ・ステップ・ジャンプと言っらしい。じゃーん！と口で効果音を出しつつポーズを決めた3人――いやいやではあるようだが、律儀にジャン・ポールもポーズをとっている――を見て、アレイスタはリアクションに困った。

アホだアホだと思ったが、そんなことをおくびにも出さない程度の分別はある。ただ、大真面目に面白くもないネタをやっている大人3人を見ていたら。

「つぶ……」

アレイスタは、つい吹きだしてしまった。

それがよかったのか悪かったのか。

妙に嬉しそうなイムホテップとステフェンは、なぜか4人でのポーズを考案し始め、少し照れくさそうなジャン・ポールもなぜか乗り気な様子で熱心にうなずいて会話が進み始めた。ちよつと待ったちよつと待った！

「あの、私はちよつと…」

決めポーズに参加したくない、と抑えるように手をあげた状態で振り向いた3人と目があつた。

…とても輝いている。

ああ、こういうとき、当たり障りなく断るにはどうすればよいのだ、とアレイスタは冷や汗をかいた。職人は職人であるからして、例えここで気分を害してもきちんとしてくれるだろう。しかし、仕事を依頼する身としては楽しく仕事をしていただきたい。

アレイスタは博士とある意味引きこもり生活をしていたため、対人能力が低い。何せ話したことがある人物も片手で足りるほどだった。

そして透子は、なんというか典型的な日本人だったので、直接的な断り方というのはまずしない。遠まわしな婉曲表現バンザイ。

ああ、視界の端でサー・エセルバートと女性が応接セットに腰掛、いつの間にかお茶を始めているのが見える。にこやかにこちらを見ている。

「…その、紹介者の立場ですのぞ！」

躊躇いなくサー・エセルバートを巻き込むことにした。そう、自分ができなければ助けてもらえばいいのだ。

これぞ透子が社会人になって身に着けた中、もっとも役立つビジネススキル。『面倒ごとはよろしく』解決法である。投げ先は上司だろうが同僚だろうが部下だろうが、自分でなければどうでもいい。メリットとして面倒ごとはなくなるが、デメリットとして人望を失っていく。かつこよく言えば諸刃の剣だ。

軽く目を見張ったあと、面白そうに笑うサー・エセルバートが見える。

3人はくるつと後ろを向き、サー・エセルバートを見た。素材を吟味する目になっている。

「やりませんよ？」

につこりと例の笑みを浮かべてきつぱりと断るサー・エセルバートに、内心拍手を送る。

「やりません」

残念そうな顔をした彼らを見て更に念を押している。肩を下げる3人にちよつと心が痛んだが、まあ仕方ない。

でも、サーエセルバートがアホなポーズをとるのはちよつと見たかった。

視界の隅で文字が踊る。

【面倒ごとは回避しました】

【スキル「面倒ごとはよろしく」を取得しました】

どつせなら、NOといえる日本人の称号がほしい。

009 もうちょっとなんとかしてください

アホなことをやって時間をつぶしたが、3職人とアレイスタも、栗鼠嬢とサー・エセルバートの座っている応接セツトに着いた。

お誕生日席に着いていた栗鼠嬢が、にっこり笑って紅茶と焼き菓子薦めてくれる。美味しい。生活水準があまり変わらないのは素晴らしいことだ。

高い窓から入ってくる風が心地よく、市場の喧騒がかすかに聞こえてきた。

「…さて、じゃあ、改めて話しを進めさせていただこうかね」

軽く咳払いをしたイムホテップの声に、アレイスタは姿勢を正した。

魔道具というのは、特に量産版でないものは、非常に高価なものだ。

量産版は、家電のような扱いで庶民層にも馴染んでいる。が、それも服でいうならプレタポルテ。一般庶民から見れば高い。

それが量産版でないとどうなるか。アレイスタは値段に検討もつかなかった。株やダイヤモンドのようなものだろうか、とは思う。思いはするが、いずれにも馴染みのないアレイスタや透子には相場がまったく分からない。

ただ、ふざけていいものでもないだろう、という認識だ。

そんなアレイスタに、席に着いたメンバーが軽く苦笑した。イムホテップが言葉を続ける。

「はじめに、全体の流れと、今日の打ち合わせの流れ、この2つの

進め方を決めませんかね。

まず、我々がよくやる決め方を説明させていただきたい。
問題なければ、今回もその流れにしたいと思っております」

いかなかな、というイムホテップに、サー・エセルバートを少し見る。彼はあまり話に口を挟むつもりはないようだった。普通に茶を飲んでいる。

私に決めろということかな、と頷く。

「はい。」

流れを教えてくださいませんか」

イムホテップが説明してくれた流れは、こういったものだった。

全体の流れとしては、最短で3回の打ち合わせが必要。

1回目（今回、無料）。

依頼者が要望を伝える。

要望というのは、効果や利用イメージ、利用タイミングといったものの他、作成期間や値段。

要望を聞いて、職人たちは実現性検証を行い、見積もりを作成する。

見積もり作成は一律300ルラン。

この段階で実現が難しそうだったら、職人はそう伝えるので、見積もり依頼しないほうがいい。

2回目（大体1週間以内）。

見積もりを元に、依頼者の要望と条件のすり合わせをする。

ここでGOサインが出たら、職人は作成に取り掛かる。

この後3日以内に、依頼者は前金を支払う必要がある。

3回目。

作成された魔道具を依頼者が確認する。

「…いつもは、こういった流れです。
どうですか」

正直、時間はかけたくない。それに、見積もりにかかる値段を言われてもよくわからない。普通はどれくらい時間がかかるのか、人件費がどれくらいか、技術料がどれくらいか。相場がわからないし、こういった場合に値切るものかさえ判断できなかった。

確か、博士と2人、1週間分の食料を届けてもらうのに、レネ爺さんにお礼の食事と手間賃の30ルラン、食料代の150ルランをミス・リップに払っていた。…からまあ妥当そうだと思う。思うがよくわからない。

よし！とアレイスタは決めた。

考えてもわからないので、考えないでいいだろう。何かあったらサー・エセルバートがケチをつけるんじゃないだろうか。茶をすすってるのだからそれくらいしてくれてもいいだろう。あんまり時間がかかるなら旅先に送ってもらってもいい。

にっこり笑ってうなづく。

「その進め方で問題ありません。
本日はよろしく願います」

視界の隅で文字が踊る。

【検討事項をスルーしました】

【今までスルーした検討事項の通算が300になりました】

スリー・ワイズ・モンキース
【スキル「不見、不聞、不言」を取得しました】

… 見えない、見えない。

「ありがとうございます。

あとは、今回の打ち合わせで、要望の魔道具の性質に合わせて担当者を決めたいと思っております」

この場にいる3人は得意分野が違うのでね、と 髭をなでながら頷いたイムホテップの言葉を、ステフェン・スクルドが継いだ。

「ホップは武器、エセルバート卿の持つてる武器なんかは彼が面倒を見てる。

僕は防具で、ジャンプは何でやるよ」

なんとなく、人物と得意分野が合っていない気がしたが、アレイスタは口には出さなかった。

いかにも穏やかな幅広さんことイムホテップは攻撃的でないし、軽いおどけた雰囲気の高さんことステフェン・スクルドは守りなどに入りそうにない。ツンデレ小柄なジャン・ポールは要領が悪そうだ。ただ、彼は器用貧乏というとしっくりくるかもしれないが。

ちなみに、と笑って目の前のステフェン・スクルドが続けた。ばちん、と気取って片目をつぶって見せる。

「君が所有することになった、ロザリア博士の『お下がり下郎！01号』は僕の作品だよ。

大事にしてね」

…聞き間違いだろうか、とアレイスタは思った。

「はい？」

「魔道具だよ、銀色の懐中時計の形をした」

なるほど、OSGGR-01という型番は、そういった意味だったらしい。

亡くなった博士のを容貌を思い浮かべたアレイスタは、似合っていると感じそうになったのを押さえ、あいまいに微笑んだ。

日本人的なお茶の濁し方で何が悪い、と思う。大丈夫、視界の隅で文字が踊っても気にしない。無難な人生万歳。

「…実は使い方がよくわからないので、後で教えていただけますか？」

「了解しました、お嬢様」

おどけた仕草で笑ってみせるステフェンに、お願いしますと頭を下げた。

話が進んでいる間に、ちょっと考えた風のジャン・ポールが、お弟子さんの1人を呼んで指示を出した。お弟子さんがなにやら機材を運んできた。小さな水晶玉がつながっている箱と、ペンのようなもの。これも魔道具だろうか。

「では、要望をお聞きしましょうか」

「はい。」

私は、同胞を探すために、旅に出ようと考えています。

それで、身を隠すための魔道具を」

持っておけとサー・エセルバートに言われました。とは言えないと、サー・エセルバートが口を挟んだ。

「…その、彼女のステータスを見ながらにしませんか」

アレスタが水晶玉に手を置いたら、箱のようなものから光が飛び出し、壁に文字が映し出された。なるほど、この魔道具は映写機プロジェクタ的な使い方をするものだったらしい。では、あのペンのようなものは指示棒ポインタのようなものだろう。

ステータスを見た人々は、特に何も言わなかった。

たぶん、彼らはすでに知っていた。ただ映し出したほうがズレもなくなるし、アレスタも参加できるから都合がよいと判断したのだろう。

…と、思ったのだが。

正直、ステータスを見たのが初めてのアレスタも、ゲームをやるらない透子も、見てもなにも分らない。だって平均を知らないのだ。せいぜい、自分のステータス内で、これが高くてこれが低いんだなーということしか分らない。

誰か解説してくれないかな、とちらりと視線を上げる。

壁近くに座っていたイムホテップとサー・エセルバート、栗鼠嬢は壁の文字を見たまま、目の前に座っていたステフェン・スクルドがなんか目をそらした。横のジャン・ポールを肘で突いている。ジャン・ポールは嫌な顔をして身じろぎしていたが、アレスタが見

ていたことに気づくと軽く咳払いをした。

…この時点で、どうやら彼らは、アレイスタにステータスの説明をしたくなかったのだ、と気づいた。

「ええと…。

魅力と…運、を。

何とかしたほうがいいんじゃないか」

「…やっぱりそう思いますか」

サー・エセルバートが同意の声を上げた。

「普通に生活を送る分には、なんとかならなくもない…かもしれないがね。

お嬢ちゃんは、一人で旅をする予定なんだろう？
なんとかしとした方がいいだろうなあ」

イムホテップが、髭を撫でながら同意した。
ステフェン・スクルドが、うんうんと頷く。

「誰かしら一緒にいてくれればいいけどねえ。

1人だと寄ってくる面倒ごとを回避するのもしんどいんじゃないかなあ。

本当は、何か攻撃手段も作ってあげたいけど…」

腕を組んで、イムホテップがうめく。

「…これは、ちょっとなあ…。

もうちょっと、なんとかならねえか」

サー・エセルバートが頭を下げた。

「すみませんが、もうちょっとなんとかしてあげてください」

ステフェン・スクルドが同意した。

「僕も、もうちょっとなんとかしてほしいなあ。

『お下がり下郎！01号』はそこまで頑丈にできてないんだよ。
あんまり頻繁に使われたくないなあ」

ジャン・ポールがわめいた。

「それはもうちょっと頑丈に作っておけよ！
それに、なんで全部オレに言うんだよ！」

すみません。

なんだかよくわからないけど、もうちょっとなんとかして下さ
い。

でも、どうやら担当はジャン・ポールに決まりそうだというのは、
アレイスタにもわかった。

010 ジャンプ氏によるアレイスタのステータス解説

ステータスとは、概要、加護、称号、スキル、能力値といった、その個人に付随した項目をまとめて指す。

概要は、名、外見的特徴や年齢、適応属性といったものが記されている。所有魔道具も確認できる。

加護は、神から与えられるもので、能力値への補正および副次効果が与えられる。大抵は、運と何か。

ちなみに、神は主に2種に分かれる。幸運を与えてくれるものが善神、悪運を与えてくれるものが悪神である。

称号自体は大した意味はない。なんらかの条件を満たした場合に与えられる。称号取得がスキル取得の条件になっている場合が多い。

スキルも、取得自体は称号とあまり変わらない。

常時発動型と逐次発動の2種に分類される。スキル自体にレベルが設定されており、レベルが上がるほど効果が大きくなる。効果はさまざま。能力値への補正もある。また、スキル自体が成長するものも多い。

能力値は、個人の能力を数値で表したものである。これは、種族特性に基づき生まれつき割り振られたものが元だが、その後の生活や訓練により成長がある。当然、逆に退化もある。

また、加護やスキルにより補正が入る。

…と、ジャン・ポールが説明してくれた。

どうやらいわゆるステータス画面で確認できるものが、一くくりでステータスと呼ばれているようだ…。

魔道具で壁に映し出されたステータスを眺めながら、透子の記憶を元にアレスタは考えた。多分、個人で確認できるようになるというのも、ステータス画面のことなのだろう。アレスタはできないが。

ジャン・ポールが言いにくそうに解説してくれたアレスタのステータスは、ようするに、こういうものだった。

人ごみにいれば、魅力のせいで目立つ。

運が人よりひどく悪いので——特に幸運がまったくないので——、何か問題があれば大抵巻き込まれる。

面倒ごとに巻き込まれても、残念。

攻撃を受けたとしたら、直接攻撃であれ魔法攻撃であれ、感覚が鈍いので、当たってから攻撃を受けたことに気づく。そして、体格に恵まれていないので、攻撃が当たったら多分アウト。

じゃあ先手必勝で先に何かできるかというと、これもまた残念。直接攻撃を行うには、感覚が鈍いせいでのに当たらない。そして、力が弱いので当たってもあまり意味がない。

魔法攻撃を行うにも同様に鈍さがネック。魔力はあるのに、どうも、魔法という感覚自体になれてない。

「…と、いう感じ、なん、だ、が…」

総合値は悪くないが、はっきり言つと、バランスが悪いというか残念というか…

…その、まあ、何だ。

元気出せよ！」

聞いたステータスの特徴は、甥っ子が言ったとおりだった。

気の毒そうに、こちらを気遣うように、ちらちらと向けられる視線が痛い。

空気が重い。

が、それを完全に無視したように、イムホテップが気楽な声を出した。

「しかし、お嬢さんは変わった称号やスキルを多く持つてるねえ。

ここらへん、」

といいながら、イムホテップが壁に映し出された文字をさしたのを見て、あれ、とアレイスタは首を傾げた。他と違って詳細が写されない。

「詳細が公開されとらんし、ワシは見たことない。
なんだろうねえ」

指された先の項目としては、称号「乙姫」^{リトル・マーメイド}、「靴の中の石」^{エイリアン}、ユニークスキル「控えよ僕」、「八尾比丘尼の素」の4つ。能力値補正以外については詳細がわからない。

わからないが、なんとなく予想がつくものもある。が、言う気にはならなかった。

大体、「八尾比丘尼の素」って。食われる前提じゃないか。

苦笑いを浮かべるしかない。

「…その、あの、でも、珍しいですよ！
普通、5つも加護を持っていますせん」

その場の空気を換えようとしてか、栗鼠嬢がなんとかフォローのための言葉をつむいでくれたのだが。

「いや、でもこの「自己愛の神の偏愛」は微妙じゃないかね。

この幸運の項目を見ると、マイナスの加護になつとる。

こっちの3つがなかったら0以下になつとるぞ」

「たしかに、こっちの3つは、それぞれ気の毒に思った神々が何とかがんばったって感じだよねえ。

ミラクル
「生きている不思議」なんて称号、初めて見たよ」

イムホテップがばつさりと切り、ステフェン・スクルドに止めを刺された。栗鼠嬢が横目でにらんでいるのにも気づいていない。

目の前のジャン・ポールは頭を抑えている。きつと2人とも、職人特有のスキル「—AKY（あえて空気読まない）」を身につけているに違いない。

ここで話題にしているとおり、アレイスタには5つの加護がついている。

「自己愛の神の偏愛」で悪運+5と幸運-3されたのを、「トイ

「レの神の慈悲」、「洗濯の神の同情」、「芋の神のお情け」がそれぞれ幸運をひとつずつ＋１してくれている。もうひとつは、「貧乏籤の神の寵愛」で、これは悪運を10上げている。

副次効果もばつとしない。特に、悪神の2つ。「貧乏籤を引くとき、必ずアタリを引くことができる」「かつこいいポーズを取って、相手を挑発することができる」なんて、何に使うのだ。

「ね、このかつこいいポーズって、やってみてよ！」

明るいステフェン・スクルドの気楽な声がいらつとくる。彼は常時発動の挑発スキルを持つてるんじゃないだろうか。

寒くなってきましたね、と栗鼠嬢がさりげなく席を外した。言われて見れば少し肌寒いし、何か起きたのか通りが騒がしい。いそいそと高窓を閉め始めた彼女の空気読みスキルは高いのだろう。

「ええと、巻き込まれるのは前提なんですか？」

アレイスタが尋ねると、ジャン・ポールが顔をしかめた。

「これだけ運がないとなあ…」

巻き込まれた後は、これは文句なく高い知力を活かし、何とか交渉で活路を見出すのがいんじゃないか

「…まあ、いざとなったら、トイレに隠れて歌えばいいですよ」

と、スキルを見ながら慰めるようにサー・エセルバートが言った。彼が見ているのは、スキル「トト」と「ローレライの歌」だ。

「トト」は、水周りのトラブル解決のほか、水周りにいれば相手の敵愾心をそぐことができるという。

「ローレライの歌」は、対象を誘惑することができる。
実際、アレイスタができる最大の対処はこんなところだろう。ト
イレの神様様である。

「やっぱり、運と魅力が最大のネックだな。
これを何とかしないと」

ジャン・ポールが腕を組んで考え込んだ。 他も異論はないようだが、アレイスタは釈然としない。

「その、そんなに私は運がないんですか？
今まで普通に生活できていましたし」

「さっきも言ったが。
これだけ運が悪いと、何か起きたら間違いない……」

「きゃあああああ！」

と、高窓を閉めていた栗鼠嬢が悲鳴を上げた。
なんだ、と振り向く間もなく、思い切り体を引き倒される。目の
前にざっと何かが突き出された。 白い羽がぱつと舞う。

アレイスタは、一瞬遅れて、それがジャケットに包まれた腕だと
気づいた。 サー・エセルバートが、横に座っていたアレイスタを引
き寄せて、襲来した何かからかばってくれたらしい。

襲来した何か。

カッとローテーブルに着地し、コケコッコと高らかに啼いたの
は、ごく普通の鶏だった。

2羽。

どうやら市場から逃げ出したらしい。

騒がしかったのはこれが原因か、とアレイスタは思った。サー・エセルバートがため息をついている。

「…やっぱり、運と魅力が最大のネックだな。

これを何とかしないと。

これだけ運が悪いと、何か起きたら間違いなく巻き込まれる」

「…はい、お願いします」

高窓から進入し、サー・エセルバートに払われた鶏は、なぜか2羽ともアレイスタの膝の上に収まった。

上機嫌で時々啼くのがうるさいし、食い込む爪が痛い。

視界の隅で文字が踊る。

【鶏に気に入られました】

【鶏、猫、犬、ロバのそれぞれの種族に気に入られました】

【称号「家畜ブレイメンズ・ディアたちのお気に入り」を取得しました】

【スキル「ブレイメンの指揮者」を取得しました】

そういえば、宿屋で犬猫になつかれて、来る途中にロバに甘噛みされたな、とアレイスタはぼんやり思い出した。啄ばまないでほしい。

「おや、増えたのう」

「ねえ、このブレイメンの指揮者ってやってみてよ！」

気楽な声に殺意が沸いた。

011 まあ魚人ですからね

結局。

担当者は予想通りのジャン・ポール、方向性は運と魅力を何とかすること、形は1人で持ち歩いていても目をつけられないようなものの、で見積もりを依頼した。

要するに、当初予定どおりの、目立たず、巻き込まれず、ための道具となった。妥当じゃないか？、というジャン・ポールのお墨つきだ。他の2人は、少し残念そうな顔をしていたが。

見積もりが出来たら、宿屋に連絡をくれるという。

…巻き込まれた後は、まあ、大人しくトイレで歌を歌おう。

ついでに、ステータスを非公開に設定して、ステフェン・スクルドに『お下がり下郎！1号』の使い方を習った。と言っても、あの魔道具で表示されているステータス画面上で、ペンのような魔道具を使って設定変更しただけである。ステータスの公開設定をオフに、所有魔道具欄OSGGR-01の待機設定をオンに。

『お下がり下郎！1号』の待機設定をオンにした瞬間、懐中時計の表面に目が現れ、にんまりと笑った。

そのホラーな外見に、アレイスタは軽く引いた。

「適応属性に合わせて仕様が変化するように作ってあるんだ。今日は遅いから、オンにするだけにしておくけど、次回は調整するから」

もし使ったら教えてねー、と手を振って送り出された。

ちなみに、鶏は、持ち主が引き取りにきました。

リアルドナドナに心が痛まないでもなかったが、アレイスタは美味しく頂く立場なので文句は言えない。が、へたれなので視線は逸らしました。ごめんなさい。

アレイスタの心を悟ってか、悄然と去っていく姿が哀愁をそそった。

気を遣ったらしいサー・エセルバートが話しかけて意識を逸らしてくれたのが、少しありがたかった。

階段を降りたところで、横から声をかけられた。

「おい、エル！

エセルバート！」

そちらを見れば、2頭の馬からそれぞれ人が降りてくるところだった。紺色の制服を着ている。どうやら、兵士のようなだ。

声をかけられたサー・エセルバートは、動きを止め、苦いものを嘔み潰したような顔をしている。ゆっくりと振り向く動作を見て、ああ、彼は関わりたくなかったのだなとわかった。

その気分がわかってか、1人はしてやったりという顔をしているが、もう1人は軽く肩をすくめている。

「…どうした。」

見廻りの時間はもつと早いだろう」

「どっかの通りすがりが、人買いの下っ端を捕まえてくれたからな。取調べが長引いたのさ」

おかげでこの時間だ、と肩をすくめながら、馬を引いて近寄ってくる。サー・エセルバートがそれに合わせて微妙に腕を引いた。彼の腕を掴んでいたアレイスタは、必然的に一緒に下がることになる。兵士が、面白そうに片眉を上げたのが見えた。

「で。」

紹介してもらえねえの？」

「おい」

にやにやと笑っていた兵士が、サー・エセルバートの肩越しにこちらを見下ろしてくる。後ろからついてきた兵士が嗜めるように声をかけたが、引く気はなさそうだ。

ため息を吐いたサー・エセルバートが、わずかに体を寄せる。軽く腕を放されたので、フードを外そうとしたら、頭にぼんと手を置かれた。どうやら、外すなということらしい。

仕方がないので、軽くフードを引き上げ、顔を覗かせた。相手の顔も見ずに挨拶するわけにはいかない。日本人特有の愛想笑いを添えて。

ら、相手が思ったよりも近くにいて驚いた。サー・エセルバートの肩に腕をかけてアレイスタを覗き込んでいた。息を呑む音が聞こえた気がしたので、相手も驚いたのかもしれない。

近くにいた彼が笑っていた方だろうか、骨格が太く、かなり体格に恵まれている様に見えた。サー・エセルバートと同じ位の高さだ

が、がっしりとして見える。真ん丸く見開かれた目は、琥珀色。短く刈り込まれた同色の髪はこめかみ辺りに黒メッシュが入っている。口から覗く牙。匂いから判断して獣人。

それを見て取り、アレイスタは嫌な予感がした。

その男性をアレイスタから離すように、サー・エセルバートが腕を入れて胸を押した。彼は、今度はそれに逆らわずに下がる。それでようやく、アレイスタはもう1人を確認することができた。藍色の髪と目、象牙色の肌をして、この世界では珍しく眼鏡をかけている。こちらは、中肉中背といったところか。他の2人に比べたら小さい。

「こいつらは同期です。」

「こちらは、従妹のアレイスタ嬢」

サー・エセルバートと同種の仕事をしているらしい。どうもお廻りさんみたいな感じみたいだが、似合わんなあと思う。従兄殿の押しの強い性格は、政治家かヤクザのほうに向いているだろう。もっとも、それを顔に出したりはしないが。

紹介を受けて、アレイスタは服のすそをつまんで軽く礼をした。

眼鏡の人が、はじめた様に自己紹介をしてくれる。

「はじめまして、アレイスタ嬢。」

「オットー・ペインです」

彼は横でぼうっとしているもう1人を肘で突いているが、こちらはアレイスタをじっと見たまま反応しない。正直、視線で穴が開きそう。サー・エセルバートは完全に彼を無視している。

「アレイスタ・ゴメスです」

差し出された手を取って笑顔に向けた。透子ことアレイスタにとって、愛想笑いはデフォルトである。
と、横で体格のよい彼が声を出した。

「…いい…」

そちらに顔を向けて、思わずアレイスタは鳥肌を立てた。
ちよつと、今舌なめずりしましたよこの人！

思わずドン引きしたアレイスタに対して、男は肉食獣の動きで近づいてきた。

止める間も有らばこそ、がっとなぎしめられる。

彼は、アレイスタの首の辺りに顔を寄せ、すんすんとおいを嗅いだ。

視界の隅で文字が踊る。

【虎人の誘惑に成功しました】

【猫化動物および猫科獣人の誘惑に成功しました】

【称号「猫まっしぐら」^{カルカン}を取得しました】

【スキル「猫まんま」を取得しました】

していないしてない誘惑してない！

心の中で悲鳴をあげる中、恍惚とした声が届いた。

「超イイ…」。

すっげ旨そう…!」
「っひひひひひッ!」

怖い怖い怖い!! 旨いって字がおかしい!
喉の音がごろごろと聞こえるのが余計に怖い。

舐めないで! 痛い痛い! 削られる! 何か減る!!

と、アレイスターの悲鳴を聞いて、呆気にとられていた2人が動き始めた。

「離れろ!
このクズ!」
「つちよ、ヴィンス!
なにやってんだよ!」

鬼のようなサー・エセルバートの怒声と、眼鏡のペイン氏の悲鳴じみた声が響く。サー・エセルバートに顔面を鷲づかみにして引き離され、ペインが男を後ろから羽交い絞めにし、なんとかアレイスターは解放された。

恥も外聞もなくサー・エセルバートの背中に隠れてしがみつく。

何この人。怖い、超怖い…!

「この変質者が…」
「ヒッ!?!」
「痛い痛い痛い!
潰れる、つぶれるって!」
「! エセル様…!?!」

メキメキメキと音がするのに気づき、慌てて止めに入ったアレイスタは、サー・エセルバートの顔を見て軽く後悔した。紳士の仮面が剥げて、地獄の鬼もかくやとばかり、実に恐ろしい顔をしている。いつも笑顔で怖いと思っていたが、笑顔が剥がれたらもつと怖かった。途中悲鳴を上げたペインは、これを見たに違いない。

正直、初対面の相手などどうでもいいから見なかったことにしたい。が、男の後ろからこちらに注がれるペインのすがるような眼差しに、しぶしぶ動く。

「あの、エセル様、もう」

「すみません、ターシャ。
無礼なヤツで」

我に返ったのか、につこりと笑顔が向けられた。男の顔を驚づかみにしたままだが。

この怖い「いつでも笑顔」は、剥がれている方がよほど怖いということを目撃した後なので、なんとも言えない気分を味わう。

「その、大丈夫ですから」

だから離してあげてください、と言えば、優しいですねと返される。そういう問題じゃないと心の中で悲鳴をあげつつ、引きつった笑みを浮かべてあいまいにごまかした。単純に、目の前のスプラッタも怖いだけだ。

012 能力値の有効活用

アレイスタを急襲した男は、サー・エセルバートに驚つかみにされた顔が痛むらしく、あごをさすっていたが、アレイスタの視線に気づいてにかつと笑った。

「俺はヴィンセント・ディオーン。

ヴィンスでいい。

よろしくな、ターシャ嬢」

手を差し出された。気がつけば愛称で呼ばれている。サー・エセルバートが呼んだのを聞いていたのだろうが、なんというか、実になれなれし…もとい、人懐こい人物だ。

なんとか笑顔を浮かべて手を取ろうとしたら、伸ばそうとした手をサー・エセルバートに握られた。彼は同時にディオーン氏の手を叩き落としている。見事な早業。

「痛ッてエ…。

勘弁してくれよ、この馬鹿力」

「死ね。

即座に死ね」

「ははははは…」

ディオーンは叩き落とされた手を痛そうに振っているが、対するサー・エセルバートはクールなものである。貼り付けたような笑顔だが、綺麗に磨いたブーツについたナメクジを見るような目をしている。おそらく、隙を見せたら即座に塩をかけるだろう。

ペイン氏が乾いた笑いを浮かべている。アレイスタは、彼にシンパシーを持った。その小市民的な態度がまことに好感が持てる。よ

く見れば少し顔も凹凸が少なめだ。肌も象牙色だし、実にいい。彼の一族は東の方の出身なのかもしれない。

しかし、とアレイスタは思った。

2人とも、仮面が剥げたサー・エセルバートに案外、普通に接しているところを見ると、ひょっとして彼の仮面はしょっちゅう剥けているのかもしれない。

「しっかし」

ずいとう身を寄せられた。ひいと心の中で悲鳴を上げ、一歩踏み出してかばってくれたサー・エセルバートの背中に逃げる。失礼かとは思ったが、怖いものは怖い。なんていうか、本能的に。

すん、と鼻を鳴らす。

「旨そうな匂いだよなあ。」

他の獣人からは、こういう匂いがしたことはなかったんだが」

首を傾げて、ターシャちゃん、なんの獣人？と尋ねられた。それで、そういえば、ホップ・ステップ・ジャンプの店で、ステータスを非公開に設定したのだと思い出した。たしか、スキル「力量把握」を持っているサー・エセルバートは非公開設定でも見えると言っていたので、これはレベルの違いか、もしくはスキルを持っているのだろうか。

「はい。」

私は魚人です。

魚の、獣人で」

「へえ、珍しいなあ。」

だから今まで嗅いだことがなかったのか」

魚人は珍しい。アレイスタは、博士からそう聞いている。集落を見たという話も聞かない。

なんでだろうと思っていたが、甥っ子に聞いた話を思い出した。たしか、彼は、魚人は人気がないらしいと教えてくれた。オンラインでまったく見かけないらしい。どうやらゲーム達者な方たちは、半端スベツクな魚人を選択しなかったのだろう。

魚人が珍しいのは、おそらくそれが原因である。

「魚人ってのは、こんな旨そうな匂いがするんだなあ」

すんすん、と鼻を鳴らしながら、こちらに近づいてくる。笑顔で間に入ってくれるサー・エセルバートに感謝しつつ、すつと後ろに隠れた。試しにと齧られてもしたらたまらない。ディオンをたしなめているペインが苦笑しながら同意した。

「たしかに、魚人は珍しいね。」

「さすがゴメス家ってところ？」

「いや、彼女は伯母の養女だ」

「へえ？」

ゴメス家はある意味有名な家系である。

獣人は、人態のほか、獣態が取れるかどうかが判断の基準となる。獣人の子が獣人とは限らない。混血が進めば、逆に獣態を取れなく

なり、獣人の枠から外れる。ゴメス家は、混血が進んだ例としてよく挙げられる。

元々ゴメス家は傭兵として有名な家系だ。傭兵として強さを貴しとし、混血が珍しい時代ながら、強いと分かった血を積極的に取り入れていた。開祖は、熊と鰐の形態が取れたという。それが、獣人でなくなったのは7世代ほど前。当初の常識で獣人は増え続けると思われてたため、公表されたときは酷く驚かれたと言う。

サー・エセルバートの母親、ローウェル女伯爵の家系は、若い狼家の名のとおり狼の獣人が祖であり、彼女も獣人だったが、ゴメス家と血が混ざった2人の息子は獣態を取れないため、人間である。

彼らは、つまりゴメス家なら珍しい魚人と縁続きでもおかしくないと考えたのだ。それくらい混血の多い家なのである。甥っ子と適当につけた名前だったが、バックグラウンドや親戚がいつの間にかできているのは不思議なものだ。

アレイスタは、サー・リチャードとサー・エセルバート、それに博士が、獣人でなくて本当によかったと思った。虎も洒落にならないが、熊も洒落にならない。木彫りの熊の鮭のようになるのはごめんである。

「早く見廻りに戻ったらどうだ」

笑顔だがあからさまに目が笑ってないサー・エセルバートに、デイオンが肩をすくめた。ペインも苦笑している。だが、実際長々と休んでもいられないのだらう、彼らは大人しく馬上の人となった。

ペインが軽く手を上げる。

「またそのうち飲みに行こう」

「ああ」

「ターシャちゃんもおいでな」

付け足したディオオンに、サー・エセルバートが冷たい目を向ける。
ディオオンはそれを笑っていない。

「あ、そういやあ、なんかお前の同僚がうるついてたぜ」

またなターシャちゃん、と付け足して馬首を返した。

少し考え込んだ様子のサー・エセルバートに視線を向ける。ディオンの言ったことの意味がわからなかったのだ。

物問いた気な視線に気づいたらしいサー・エセルバートが、軽く苦笑した。

彼は、ちよつと散歩をしながら帰りませんか、とアレイスタを誘った。歩きながら、小さな声で説明をしてくれる。

「彼らは、司法隊の所属なので、私とは所属が違ふんです。
今アレが言った同僚は、私と同じ所属の隊士がいたということですね」

と、言った後、軽く咳払いをする。

「今から私が言うのは、独り言です。
…私が属しているのは近衛隊。」

役割は、まあ、王族の私兵です。
普段は街中には下りてきません」

あ、なんか嫌な予感がする。

「エセル様、もう結構です」

「話が早くて助かります」

何か起きたら、あなたは巻き込まれそうなので、と笑ったサー・エセルバートに苦笑を返しながら、食えないヤツだと思う。

このあたりに彼の同僚がいたということは、ようするに、王族に何かあったということだ。

そして、駆けつける気はなさそうな様子。休暇中には仕事をしないという主義かもしれないが、散歩としてエサのアレイスタを連れまわして、何か起きた時の囿に使う気なのだろう。

…内心この野郎とは思うが、まあ世話になっているのだ、これくらいは付き合おう。大体、何も起きない場合の方が多いはずだ。

のんびりと歩いている途中、少し会話が途切れがちになった。馬車の中では、彼は退屈をさせないように、実に見事に話をつないでくれていた。つまりこれは、周囲に何がしかの注意を払っているのだろう。

ぼつぽつと話しながら、ああ、甥っ子はどうしているかなあ、とアレイスタは思った。

彼女は、思い出してから、暇があれば甥っ子のことを考えている。甥っ子は、透子にとって最優先事項だった。そして、博士を失ったアレイスタにとっても最優先事項である。

透子ことアレイスタの特徴は、その気楽な精神構造だろう。

彼女は考えても仕方ないことは考えない。考えても仕方ないことは、考えるだけ無駄であるとさくっと放置する。極めて合理的な精神構造をしていた。

驚きの立ち直りの早さは、会社にあつて「驚くべきストレスコントロール力」と感嘆されたものだ。一応、反省はするのだが。

だが、欲望はまた別次元の話である。

甥っ子は、かわいかった。それはそれはかわいかった。とんでもなくかわいかった。大事なことなので3回言った。

客観的に見ればどうかかわからないが、透子から見てダントツだった。

小さい頃の、あの福々としたもみじの手を握ったときは、これが幸せの形かと感動したものだ。

最近は、あまり手をつないでくれなくなつたが、それでも。少しずつ大きくなってくる手が、その成長がどれほど透子の喜びとなつたか、あの子は知らないだろう。

わさわさと手を動かしながら、遠い目をしてその感触を思い出す。

ああ。

ひーちゃんと手をつなぎたいなあ…。

ぼうつと考えていたら、サー・エセルバートに声をかけられた。

「ターシャ。

あなたは実に見事に、私の予想以上の結果を出してくれますね。
素晴らしい」

その感心したような声に、アレイスタは首をかしげた。
なんのことだ、と視線の先に目を落とせば。

「…え？」

半泣きの少年と、手をつないでいた。

013 拾い物は厄介ことの予感

うわー…

これ、私が拾ったのか。

自分が手をつないでいた少年を見て、アレイスタは微妙な気分を味わった。

さすがに手遊びに引つつかんで来たわけではないと思うが、自信がない。なにせ、手をつないでいた自覚もなかったのである。

おそらく、餌のついていない真っ直ぐな釣り針に自ら掛かった魚を見つけたら、こんな気分を味わうのではないだろうか。まあ、実際アレイスタが釣り糸を垂れようものなら、魚は喜んでかかってくれるだろうが。むしろ直接釣果入れのバケツに入りかねない。

ちなみに、手から伝わってくる感触から、脳は”甥っ子の感触じゃないね”と伝えてくる。変態くさいというなかれ。愛情のなせる業である。

さてどうしようとアレイスタが考えていた間に、サー・エセルバートは懷から取り出した魔道具でなにやら連絡を取っている。携帯電話のような使い方をしているそれは、通信石のハイエンド版だろう。

と、ぎゅっと手を握られた。見下ろせば少年が泣きそうな顔のまま前を睨んでいた。

…構えということだろうか。

アレイスタはざっと少年を観察した。

身長は、甥っ子が6つのときくらいだろうか。少し古臭く地味な色味だが、仕立てのよい服を着ている。今は明るい色味でひらひらと靡く服が流行っている様子なので、体に沿ってきちんと仕立てられた彼の上着は、いかにも型遅れで礼服じみて見えた。今となっては、おそらくきちんとした場面でない限り見ない代物ではないだろうか。元は裕福な家の子が、落ちぶれる前のお古を着ているといった雰囲気だ。もっとも、博士のお古のグレーのドレスを仕立て直して着ているアレイスタのほうが、よほど古臭いだが。

だが、地味な色味の服を着ているから目立たないかというと、そうでもない。

横に見えるふわふわとした金髪は輝かんばかり。けぶるような金髪のサー・エセルバートとは正反対の、実に派手な色合い。

覗く耳は、先ほど会ったステフェン・スクルドとよく似た葉のような形をしているが、同種ではないだろう。彼の森のような匂いは異なる、少し不思議な匂いがする。乳臭さが混ざったというわけでもなさそうかな、と思う。

なんというか、どうにも派手な存在だ。それに、途中で転びでもしたのか、全体的に少しすすけて見える。仕立てのよい服が台無しだ。サー・エセルバートの話しぶりからは王族のようだったから、服は変装なのだろうが、明らかに失敗して酷く悪目立ちしている。

先ほどから周囲の視線が痛い。

実際のところを言えば、アレイスタは自分もいるだけで目立つ存

在だということを忘れていた。たとえフードを被っていても目立つのだ。おかげで相乗効果で目立っているのだが、そこは本人が気づかない。

さて、構うにしても、どう扱おうか、とアレイスタは思案した。

完全な幼児だったらよいが、甥っ子もこのくらいから子供扱いを嫌がり、気難しくなった。ちょうど、小学校に入学して友達の輪が広がった頃だ。もっとも、それも子供らしい態度で実に可愛らしかったのだが。姉夫婦が亡くなった後はさらに大人びてしまったことだし。

迷った拳句、アレイスタは特に何も言わず、手を握り返すだけにした。少年が、ゆっくりとこちらを見る。泣きそうな顔のままだが、睨みつけるような目を崩さない。目は、トルマリンのような青だった。

その顔を見て、アレイスタは気づいた。
前に、この顔を見たことがある。

それは、姉夫婦が亡くなった時だった。

…ああ、泣くのを我慢しているのか。

途端に、どうでもよかった子供に愛情がわく。優しくしてやろうという気分になった。自然に笑顔が浮かぶ。

それを見た少年が目を見開いた。くしゃりと顔をゆがめる。

「つつえ、ええつ、ん、えつ…ふえええ…ええええん…!!」

ぼたぼたと、大粒の涙を零しながら、彼はしゃくりあげ始めた。

小一時間後、アレイスタはまだ少年とともにいた。

それにしても泣く子は恐ろしい。

あの後、驚いて顔を覗きこんだアレイスタに、少年は飛びついた。首に抱き着き、更にわんわんと声を張り、泣き喚いて離れない。耳元の大音量に、アレイスタはくらくらとした。

それを見たサー・エセルバートは、アレイスタごと少年を連れて行くことにしたらしい。軽く肩をすくめた後、重さによるけるアレイスタを支えつつ、捕まえた辻馬車にやんわりと押し込んだ。

着いた先は王城だった。

威容を誇るその姿を、まさかこんなに近くで見ることになるとは思わなかったが、なにせ大泣きしている子供を貼り付けたままである。どっしりとした石造りの壁を見上げる余裕も、見事なファサードを鑑賞する余裕もない。

本来なら、おそらく辻馬車など中に入れず、馬車から降りて門番のボディチェックが実施されるのだろう。

しかし、アレイスタは少年が離れないため、身動きが取れない。サー・エセルバートが身柄を保証し実施が省略され、そのまま馬車で行くことになった。

泣く子に縋りつかれているアレイスタを、門番は胡散臭さ半分、同情半分といった目で見送ってくれた。誤解だ、泣いているのは私

のせいじゃない、とアレイスタは弁明したかったのだが、あれは多分疑われたままだ。頭を抱えたい気分になった。

そして、現在。

奥まった建物に通され、ふかふかの椅子に座っているのだが。

少年は張り付いたままである。

部屋についたとたんに、サー・エセルバートはどこかに行ってしまった。ゆっくりしててくださいと言われたが、わんわん泣く子をつけたままである。ゆっくりも何もない。

腹が減っているのだが、お仕着せを着た侍女に勧められた茶菓子に手をつけることもできない。このサイズの子供はかなり重いのだ。できるのはせいぜい、豪華な部屋の内装を観察するくらいである。

壁や椅子には、青地に金の文様が浮いた美しい緞子が貼られている。青がテーマの部屋なのだろう。

窓の外はすでに日が落ちてきており、少年が泣き始めてから小一時間ほど経っている。

落ち着くまで好きなだけ泣けばいいと思う。思うが、それは自分から離れてからにしてほしい。

いい加減落ち着いてくれないかな。耳がおかしくなりそうだ。それに、もう腕の感覚がない。

本当だったら、そろそろ宿に戻ってご飯を食べてるころかなあ。

抱えたままぼつと窓の外を眺めていたら、これまた美しく磨か

れた金色の取っ手が回る。扉を開けたのはこちらもお仕着せを着た髭が素敵なロマンズグレー。彼がずっと頭を下げて、後ろに道を譲った。

入って来たのは、サー・エセルバートが先導した一団。いつもの笑顔を見て、アレイスタは少し力が抜けた。待たされたのは短い時間だったが、知らない場所でそれなりに緊張していたらしい。

すっかり見慣れた笑顔に続くのは、なんとなく偉そうな男女2組（だつて着てるものが立派だ）。年齢はサー・エセルバートと同じか上だろうか。正直、アレイスタにはいくつかまったく判断できない。なにしろ、日本人でもなく、さらに男性はそれぞれヒゲを蓄えている。後ろに続くのは街中で見たのと同じ制服の数人。これが近衛隊だろう。女性も数人混ざっているが、こちらはミニスカートだった。すばらしい。

と、入ってきた一団を見て、少年がぱっと顔を輝かせた。

「母上!!」

「アルヴィン!!」

少年——アルヴィンというらしい——はアレイスタから離れて、女性の1人に抱きついた。母親である女性は、膝を折り彼を迎える。少年と抱き合う女性ごと、彼女を支えていた男性が抱きしめた。なるほど、感動の親子の再会か。

ようやくと解放されたアレイスタは、やれやれと背筋を伸ばした。腕も首も肩も腰も痛い。

1人椅子に座っているのも気まずいので立ち上がり、感動の対面の後ろ、眺めている人々に頭を下げた。一番前にいる男女は、未だひどく顔色が悪い。それを見て、おやと思う。どうやら、開放されたからといって、のんびり茶を飲む空気でもないらしい。

…いやな予感がした。

できたらさくつと。

決して自己紹介など聞かずに帰りたい。

のだが、さて、どうなるか。

後ろにいた制服の中、眼帯をしている男性が、一步前に出る。彼は、感動の再会を見ている、顔色の悪い男性に声をかけた。

「バージル殿下」

声をかけられた男性は頷き、顔を上げた。彼に支えられた女性も、アレイスタを見る。

声が聞こえたらしい抱き合っていた父親が母親をなだめ、この2人も顔を上げた。釣られて、少年も顔を上げる。

全員の視線を感じた。

皆、すぎるような目をしている。

……ものすごく嫌な予感した。

顔色の悪い男性が口を開く。どうやら、彼が代表らしい。

「はじめまして、アレイスタ嬢。

私は、バージル・ライアン・エリス・アルフレッドと言います。

エセルバート卿から話を聞きました。

甥を見つけて連れてきてくださったこと、感謝いたします。
本当にありがとうございました」

途中サー・エセルバートのほうを見て頷き、彼は深く頭を下げた。ゆつくりと顔を上げ、ひたとアレイスタを見据える。

切羽詰った顔をしていた。

彼の名乗りに家名が含まれていなかったことに、アレイスタは気づいた。つまり、王族ということだ。そして、その名前に聞き覚えがある。

アレイスタとて、自国の王子の名前くらい知っている。
バージル皇太子。女王アレクサンドラの第1子だ。

「そして、お願いしたいのです。

私たちの娘を探すのに、協力していただけませんか」

なんてことだ、とアレイスタは思った。

しばらく、ご飯にはありつけそうにない。

014 作戦会議

結論から言うと、アレイスタは、さくつと長いものに巻かれた。正直な話、腹が減って考えるのが面倒になったのだ。

まあ面倒だなど思わないでもなかったが、どっちみち貧乏くじは引かないといけないし——彼女には貧乏籤の神の加護がある——、少女が行方不明というのは寢覚めが悪い。年端もいかない子供など鼻くそほじって笑ってればいいのだ。お姫様がそんなことするかと言われそうだが、アレイスタの考えるガキなんてそんなものである。頼んできた皇太子も、親の顔をしていた。それ以上を考えるのは野暮だろう。

アレイスタが諸の返事をする、皇太子は固い表情のまま無理やり笑顔を浮かべた。皇太子妃も、泣きそうな顔で頭を下げる。取り乱さないのは流石だが、心配で仕方ないのだろう。おそらく藁にも縋りたいに違いない。藁としては、まあ、できる限りがんばろう。

アレイスタに頭を下げた後、憔悴した表情の皇太子夫妻は、眼帯男性に薦められて退室した。確かに、少し休んだ方がいいだろう。下の者が多くいるここでは、弱音も吐けないに違いない。

できる限りさくつと片付けて、めでたしめでたし。甥っ子探しに何の遅れもなく出発！、がアレイスタにとって一番よい結果だ。

広い部屋の中、3チームに分かれる。わずかでも時間を短縮する

ためかな、とアレイスタは見取った。

ぱっと見た感じ、隊士は男女混合だが、体格がいいものが多い。博士とレネ爺さん以外に見たことがないアレイスタにとっては脅威だ。叔父従兄も大きい、この場はとにかく張り詰めた雰囲気がつい。透子の記憶がなければ逃げ出したかもしれない。

チームA、アルヴィン王子（ ）から事情聴取をするチーム。両親と、さらには乳母らしい女性が少年に付き添った。アレだけ泣いた後だからか、彼は別人のように落ち着いた受け答えをしている。違和感を覚えるほどだ。

チームB、アレイスタとサー・エセルバート、それに少し幼い印象の隊士が1人のチーム。彼がアレイスタとサー・エセルバートに、今までの経緯を説明してくれる。

そしてチームC、今後の方針を検討するメインチーム。皇太子に声をかけた眼帯の男性と、熊のような男性を中心とし、5人ほどの隊士が地図を広げてなにやら話し合いをしている。説明を受けた後は、サー・エセルバートとアレイスタもこちらに混ざることになるのだろう。といっても、アレイスタは拾い聞きして従っただけだろうが。

また、この他常時3人ほどの隊士が常駐し、サー・エセルバートが利用していたのと同じ通信石のハイエンド版を利用している。逐次入ってくる情報をまとめているようだった。

気を利かせて軽食を用意してくれたお仕着せのロマンスグレーからサンドイッチを受け取りながら話を聞く。腹が鳴りそうだったのでラッキーだ。もっとも、実際に鳴っていたら、開き直って食糧を

要求するくらいには図々しいが。

幼い印象の癖のある金茶の髪の隊士は、デーヴィッド・フォーサイス「ノースベロー」と名乗った。彼はロードと呼ばうとしたアレイスタを留めて——紳士録を暗記しておけと言った博士に感謝——、なぜか少し顔を赤らめてダヴィーと呼んでほしいと言った。すぐに表情を引き締めた（引き攣らせた？）彼が説明してくれた内容は、まあ概ねこんな感じだった。

事件は城外で起きた。

姫とアルヴィン王子は、内郭に建っている学校に馬車で通っている。この馬車が襲われた。警備についていた近衛隊士は4名。前後に2名ずつ付いていた。

馬車がある辻に通りかかったところ、とある荷馬車から鶏が大量に逃げ出す騒ぎがあり、立ち往生した。前についていた隊士の1人が、その場の収集に手を貸すため、前に出た。それに合わせて念のため、後ろについていた隊士の1人が馬車の横に付く。

隊士が横についたのとほぼ同時に、馬車近辺の複数箇所から破裂音が響く。砂煙と蒸気があがり、襲撃を受けた。襲撃人数は10人弱程度だったと思われる。

隊士たちは、視界が悪い中、多数の襲撃者を撃退するのは困難として、姫と王子を逃がすことを優先した。が、追加対応人員が場に到着するまで、持ちこたえることができなかった。

現在、姫と、馬車横についていた隊士が行方不明になっている。
また、5名ほど捕縛したが、取り調べに時間がかかっている。これらは、珍しいことにジャガーの獣人ばかりだった。魔法の痕跡はなかった。破裂音には何らかの魔道具が使われたようである。

…なるほど。あの鶏は、それであんなとこにいたのか…。

途中、魔道具店ホップ・ステップ・ジャンプで襲い掛かった鶏を思い出し、思わずサー・エセルバートと目配せして苦笑した。

逃げ出した鶏についても、鳥人が事情聴取をしたらしい。魚と話ができるアレイスタは、たぶんあまり役には立たなかっただろうなと思った。彼らの話は、韻律重視で独特なのだ。

それにまあ、王子の服装にも得心がいった。確かに彼の服装は平民の間にいれば目立つ。が、貴族子弟が多く通う学校では妥当だろう。

さて、話を聞いた後、サー・エセルバートとアレイスタはメインチームに合流した。

責任者として隊長と副隊長を紹介され握手を交わす。

隊長として紹介されたのは、皇太子に進言していた眼帯男性である。鍛え上げられた体躯とグレイの髪をもつ彼は、ラトウィッジ・ギャヴィストンと名乗った。彼のヘイゼルの左目は笑っても驚のようには鋭かったが、その厳しい雰囲気はどこことなく博士に似通っており、アレイスタには親しみ深かった。

隊長も堂々とした体躯だったが、副隊長の男性はさらに筋骨隆々、岩のような男だった。黒髪黒目で頬骨からつながるもみ上げが立派

だ。豪快な笑顔は虎人のヴィンセント・ディオンにも通じる雰囲気がある。彼はバーナード・バーンと名乗り、BBと呼んでほしいと言った。匂いから何がしかの獣人だろうとアレイスタは見当をつけた。

挨拶を終えると、アレイスタはやることはなくなった。一応話し合っている人の輪にいるが、邪魔にならないように端に寄る。

だってエサだ。作戦立案については専門家集団に任せ、釣り針につけられるのを待ってればいい。

大体、彼らが話しているのは、どこを探索するかである。王都に来たばかりのアレイスタにはまったく意味がわからない。

…あれ、私エサなの？

一瞬、まったく内容を説明されていないのに、エサだとわかってる自分に物悲しい気分になったが、仕方ないと割り切る。むしろ戦えとか言われなくてよかったよかった。大体武器どころか手荷物もほとんど持ってきていない。重いので。

正直、武器に関してはうかつとしか言いようがない。街中で発生し直行する羽目になるクエストは多い。ゲームを途中でほぼ投げ出した透子もそれくらいは知っているが、この世界で育ったアレイスタには、なんというか、自覚が薄いのだ。ここがゲームの世界であることが。だから、透子のゲーム認識を当て嵌めるのにワンクッション必要になる。

明らかに暇そうだったのか、サー・エセルバートに声をかけられた。

「ターシャ、先に着替えてきてはどうでしょうか」

確かにアレイスタは薄着である。日が暮れる前に帰ってくる予定だったので、グレーのフランネット製ドレスに途中で買ったフールド付ショールだ。

「ですが」

だが、かといって着替えもない。帰って着替えて来ていいということだろうか。と、いつの間にか後ろに立っていたお仕着せのロマンスグレーに声をかけられた。

「お嬢様、こちらへ」

さり気なく立ち上がるように誘導された。どうやら、すでに着替えが準備されているらしい。手際のよいことである。

別室で準備されていた服に着替えたアレイスタは、無言で姿見をにらんでいた。用意されていたのは男性用の服だった。やはり、仕立てがよく少し古臭くて堅苦しい。それは別にいいのだが。

「…気のせい気のせい」

軽く頭を振り、あまり気にしないことにした。

「お待たせしました」

「…いえ。」

お似合いです」

につこりと笑ったお仕着せのロマンスグレーに導かれて、再び元の部屋に戻る。

と、ちょうど事情聴取が終わったらしいアルヴィン王子が声を上げた。そのままアレイスタのほうに駆け寄ってくる。

「お姉さん、男だったの!？」

「アルヴィン!」

「殿下!」

同時に、母親と乳母の悲鳴じみた声上がる。こちらを向いていた数人が無言で視線を反らした。

エルゲントスでは成熟した大人が好まれる。そのため、女性はいこころからコルセットをつけて腰を締め、脂肪を胸と臀部に寄せる。そうして美しい釣鐘型を作るのだ。

自分の胸元を見下ろす。折り曲げた襟が若干大きめな上着のせい、手持ちのフード付ショールをかけたせい、それとも淑女らしくない髪型のせい。いまいちなんというか、…女性らしく見えない。

博士同様コルセットをつけなかったせいもあるかもしれないが、そもそも肉が薄いのだ。着けても効果は上がらなかったらう。それもこれも。

…うらむぞひーちゃん。

ムチムチを希望したのに、「とーはこんなもん」で却下したのは甥っ子だ。ちくしょう。

違う、微乳じゃない、美乳なんだ…！と心の中で叫ぶが、笑顔を保つ。

せめてもう少し高い声ならよかっただろうか。

「…いえ、私は雌性体です」

「なんだ、よかった。…です。」

そうしてると物語の騎士王子みたいですな

アレイスタの前でににこと言う王子に悪気がないのはわかる。わかるが、アレイスタの心をざくざく削ってるのに気づいてほしい。表には出さないが。

「ありがとうございます」

「でも、やっぱりドレスの方が似合います。」

…あと、助けてくださって、ありがとうございます」

王子は、少し恥ずかしそうにアレイスタに頭を下げた。なるほど、彼はこれが言いたくて話しかけてきたらしい。たしかに、あれだけ泣けば恥ずかしいだろう。

「いえ、ご無事でなによりでした」

「お恥ずかしいところをお見せしました」

顔を上げた彼は、皇太子と同じ目をしていた。

「あの、お願いします。」

ルディ姉さまと、エスをよろしく願います」

アレイスタの手をとり、必死に言葉をつむぐ。かといって、アレイスタにできることは限られる。

「努力します」

「…あなたも。」

絶対にご無事で戻ってきて下さい」

アレスタの手を握りすぎるような目をした王子は、同様に深く頭を下げた親と共に部屋から出て行った。

彼らを見送ってから、再度動き始めた周囲に紛れてすんと元の席に着く。

なんとなくだが、さっきほど雰囲気が硬くない。周りの気遣うような視線を感じつつ、アレスタは隣の従兄に声をかけた。

「…エセル様」

「はい」

「揉むと大きくなるというので、手伝っていただけませんか」

なぜか周囲の人がぴたりと口をつぐむ。

サー・エセルバートが興味深げに片眉を上げた。

「手伝うのはかまいませんが、その話は聞いたことがありません。ガセではないでしょうか」

「エセルバート卿！」

ロード・フォーサイスが悲鳴じみた声を上げた。その童顔を真っ赤にしている。

「なんてことを！」

少女に対して破廉恥です！」

「責められるのは私だけですか。

腰が痛いから揉んでくれというのと同じでしょう」

サー・エセルバートが心外だと言いたげに頭を振った。

「ぜんぜん違いますよ！」

アレイスタ嬢も！

もつと自分を大事にしないで！」

アレイスタも一緒に怒られた。

ちなみに、透子は甥っ子に同じことを頼んでもものすごい勢いで断られたことがある。あの蔑むような目は忘れられない。

「まあ、嬢ちゃん、いずれ育つさ」

副隊長のサー・バーナードに慰められた。育つだろうか。なんか、望み薄な気がする。

「…進めていいか」

ぴたりと動きが止まる。

隊長、サー・ラトウィツジの視線が冷たい。腕を組んだ彼に威圧されるようにして、作戦会議が再開された。

（ ）王子・姫は、ここでは王位継承権を持つ男子、女子という意味の敬称。別に女王の子という意味ではない。念のため。

015 エサは釣果を選べない

王都ロルーは、王城を中心に、放射上に市街地が広がっている。

王城を中心に、その周りの旧市街を守るように外壁が存在する。

これが、現在内郭と呼ばれる地域になる。さらに、人口の増加に伴い外壁外に新市街が広がり、これが外郭と呼ばれていた。

内郭（旧市街）と外郭（新市街）を区切る外壁は侵食から民を守るためのものだった。だが現状、外壁の外側にも市街地が広がったため、意味を成していない。そのため、現在は都市全体が魔道具の守りの元に置かれていた。これは整備され、今や王国の地にあつては端の村に至るまで、同種の守りが施されている。

身分証があれば守りの呪いから抜けるのになんの問題もないが、現在は主要な街道に抜ける道は検問が置かれているはずだ。空を見上げれば、日が暮れた空にうつすらと円を描く呪いが光って見えた。

アレイスタが歩いているのは、外郭の一角だった。王城の周りほど隊士がうろつろしていないが、別に治安が悪くもない。サー・エセルバートは人買いなど絶滅危惧種だと言っていた。ひっかかったアレイスタが異常らしい。

それに、何かあつたら、近くにいる隊士の1人がフォローに来てくれる。そのための通信石も（どうやらGPS的な機能もあるようだ）、信号弾も渡されている。ついでに猫科の獣人に絡まれないように、柑橘類の香水を手首にかけてもらった。

拾い聞きなのではつきりわからないが、アレイスタの把握している作戦は、作戦といえるほどのものでもない。

彼らは、この辺りかなと検討をつけた箇所を、しらみつぶしに探している。おそらく、近衛隊の持つ情報が少なすぎて、容疑者を特定することはできないだろうと考えた。探すことをあきらめてはいないだろうが、容疑者を特定できない以上、潜伏が考えられる場所を探すしかない。

いずれにせよ、彼女は指定された箇所を練り歩くだけだ。おそらく、隊士達も引つかかってくれたらラッキーくらいに考えられているだろう。吊り上げた魚が狙いと違って、彼女の知ったことではない。

正直、ぶらぶら歩き回るだけで、あまりやることがない。安全を保障すると言ってもらえたが、側に誰かについているわけでもない。気楽なものだ。

ついでなので、フィッシュアンドチップスの屋台を見つけて買い食いをする。まだ夕食の時間帯だから、こういった屋台が多く出ている。そして、彼女は見かけの割りによく食べる。

王都は歩いてみると内郭と外郭で雰囲気が違う。

昼間に歩いた内郭のほうには富裕層が集って洒落た雰囲気漂っており、今いる外郭のほうには平民が集まり活気が漂っている。行き交う種族も、外郭のほうが見た目バリエーション豊かだ。もとより少ない森の人や石の人、小人や竜人は置いておいて、人に比べて獣人のほうが多く見られた。半獣といった形態もよく見る。羞恥心からか、服が着れない完全な獣態は見なかったが。

屋台も多い。東方のものとして寿司、中華まん、ビーフン、ラーメンの様な屋台もあった。開発スタッフに色んな人種が混ざっていたのだろう。ありがたいことだ。途中、彼女はさらにお好み焼きと焼き栗を買い食いだ。再度言うが、彼女は見かけの割りによく食べる。

顔を隠して男装しているためか、トラブルも少ない。途中、何度か声をかけられそうになったものの、手首を前に出すようにすれば逃げられた。小半時ほど問題なく過ごせて、アレイスタは少し気を緩めた。

彼女は、ふと堀に目を留めた。

堀は、王城の周りを2周して、さらに外壁の周りを廻っていた。運河としての役割を与えられてもいるようで、そこからいくつか支流が延びている。彼女の目の前にあったのも、そういったものだった。

…一応聞いてみるかな。

彼女は甥っ子を探すに当たり、魚たちに手配書を回していた。口頭でだが。

— 人を探してほしいんだけど

— ヒト?? ヒトヒト? 姫^{ひい}、ひい、ヒト?

— そう、人。黒髪で黒目で、かわいいの。

— かわいい!! かわーかわいいー

かわー、知ってる、知ってる!! 姫かわいい!!

— ありがとう、でも違う。私じゃなくて。

黒いんだよ。ひーちゃんていうの。
もっとなつとかわいいの。

——姫、ひー、ここ、「コよー！」

——ちがーう。

ひーちゃんは私じゃないの。
黒いんだってば。

…

まあ、やりとりに時間はかかったが——淵に来れるのは小柄なものだけで、そういったものは知能がそこまで高くないのだ——、彼らから聞いたものは、「ひーちゃんこと川中広貴かわなかひろたかという黒髪黒目の人間の少年」を探してくれている。はずだ。…たぶん。

何か進展があつたかを認め、さらにお姫様について知らないか聞いてみてもいいかもしれない。

水路横の塀と柵をひよいと乗り越え、土手を降りる。
しゃがんで覗き込んでみると、暗いせいか魚影が見えない。

「おーい」

手袋をはずし、両手を水面に入れる。手を叩いて魚を呼べば、アレスタの気配が匂いを悟って、魚たちが集まりだす。
ぴしゃぴしゃと水が軽く跳ねた。

——姫ひい！ひいさま！ひいさまひいさま！

はしゃぎながら飛び跳ね、我先に話しかけ始める。皆が前に出ようとぴちぴち跳ねるさまに、アレスタは苦笑した。彼らはいつも無邪気だ。

——ひいさまいたー！きたきたー！！ひいさまー！！

「久しぶり」

——ひいさま、どしたの？？どしたの？ここなの？？
ここいる？ずつとここ？？

「うっん、ここにいるのは今だけ。
今日はちよつと聞きたいことがあって…」

と、視線を感じてアレスタは手を止めた。

水路をはさんで目の前、柵の向こうに男性が1人立っている。

自分をじつと見てくる男を見て、アレスタは首をかしげた。
服の上から見ても引き締まった恵まれた体格をしており——がっしりという感じではないが背が高く適度に筋肉がついている、サー・エセルバートと同じタイプだ——、若干顎が発達しているようだ。暗がりに髪色は暗く、目の色はよく見えない。髪は、肩ほどまでに太い毛束が伸びているように見えたので、編んでいるのかもしれない。年代はよく分からなかった。

ただ、息をつめたような気配が伝わってくる。

ざつと見たところ、知らない相手だ。

「…？」

はて、何かあったかと首をかしげ、アレイスタはぎくりとした。

彼女が1人で行動した場合にもっとも面倒ごとを起こすと考えられる、現在のザ・厄介スキル「猫まんま」は逐次発動型。猫化動物および猫化獣人の食欲を刺激し、誘惑することができる。アレイスタは自分でコントロールできないため、効果を阻害するために、手首に猫の嫌う柑橘類の香水をつけていたのだ。

…手首。

ちらりと自分の手を見ると、水に浸かって指先を魚にじゃれつかれている。どつぶり手首まで。

しまった…!!

うかつとしか言いようがない。

急いで通信石を懐から取り出そうとしたが間に合わない。とたん、両肩に感じる衝撃。

ぎぎぎと顔を上げたアレイスタは、自分の眼前にさきほどの男性の顔を見つけて固まった。両肩をつかまれて、じりじりと近づけられる。琥珀の目がらんと輝いて恐ろしい。

どうやら、驚いたことに男性は一足飛びで水路を跳び越したらしい。獣人特有の出鱈目な身体能力に、アレイスタは一気に血の気が引いた。足元で心配して騒ぐ魚たちに気づく余裕もない。

野生生物を相手にしたとき、絡まれない場合、どうすればいいんだろう。

アレイスタは恐ろしさのあまり、じりじりと視線をそらした。死んだふり、と考えて即座に却下する。フリをしている間に食われたらどうするのだ。

逃げたい。ただひたすら逃げたい。

が、肩をつかまれているので逃げられない。冷や汗でびっしょりの背中が冷たい。完全に腰が引けている。

と、べろりと頬を舐められた。

「ひッ!？」

ぞわわわわわ、と全身鳥肌が立った。口から短い息が悲鳴のよう漏れる。

肩をつかんでいた手を滑らせて、彼女の背をなで上げる。腰から引き寄せられた。

まったく見識のない相手にからまれる時の恐怖がアレイスタを襲った。

虎のヴィンセント・ディオーン も怖かった。でも、少なくとも親戚の知人だった。

が、現在の相手はまったく見も知らぬ相手である。恐怖しか沸かない。まして、自分より遥かに体格がいい相手である。

頭の中は真っ白だ。全身固まってまともに口から悲鳴も出ない。

怖いと思った。

この男は危ない。一人で立ち向かうのは怖い。なにより、獲物を見るような男の目が怖かった。

言うことを聞かない体を無理に動かす、カタカタ歯が鳴っているのを無視して、はくはくと空気を吐き出すだけの口を開ける。助け

を呼ぶために。

「…た、すけッ…！」

その口を、がっとな片手で押さえられる。

引き寄せたアレイスタの体に覆いかぶさるようにして、アレイスタの顔を覗き込む。

アレイスタの努力を無視するように、額同士を付き合わせて、男性が、にやりと笑った。

「…いいじゃん。

気に入ったア」

視界の隅で文字が踊る。

【ジャガー人の誘惑に成功しました】

【ハブニング偶発事故の神の興味を引きました】

呪うよ神様！！

男の口から覗く犬歯を、アレイスタは泣きそうな気分で眺めた。

断章 001 残夢

遠い日の夢を見た。

自分が小学校に入ったところだったか。
その日は朝から雪が降っていた。

ちょうど休日と重なったクリスマスの前日、広貴は夕方に父と出た。近所のお菓子屋に頼んでいたケーキと、有名なフライドチキンチェーン店の、バケツ型パーティー用パックを受け取るためだ。パーティー用パックは、去年のクリスマスに家族でCMを見、「一度食べてみたいね」と意見が一致した結果である。後で開けたあと、少し困る結果になるのだが、彼らはこの時点ではまだ知らない。

前日の深夜から降り始めた雪は薄く積もっていて、あまり雪になじみのない広貴はそれなりに注意する必要があった。荷物は父が持っていたのだが、転びたくはない。

白い息を吐きながら家の扉を開ければ、母が電話を置いたところだった。彼女は顔をしかめ、緩やかにまとめた髪をいらいらといじっていた。

「透子が20時くらいに来るって」
「へえ、珍しいね？」

来るのが珍しいのではない。事前に来ると連絡があったのが珍しいのである。叔母の透子は少なくとも週に1、2回は川中家に入り

浸っていたが、事前に連絡など入れたことがない。たとえ仕事上がりの夜中だろうが、なんの連絡もなしに来る。母親はそのことにいつも苦言を呈していた。

それでも、いつ来ても叔母は食事でありついていた。

今になって考えてみれば、おそらく母親は常に4人前の食事を準備していたのではないかと思う。妹が来る来ないに関わらず。そして、文句を言いながらも押しかけてくる妹の甘えに喜んでいた。対する叔母も、そうやって自分の居場所があることを確認していたのではないだろうか。

母親に応えるように、叔母は、土日も平日もイベントのときも川中家に入り浸っていた。恋人はいいのかと聞いたことがあったが、家族優先だと何々と笑っていた。気を使っているという感じでもなく、おそらく彼女は本当にそう考えていたのだろう。

実際、両親を亡くして彼女に引き取られた後も、彼女はイベントごとはもちろん、大抵の土日は家にいた。一度デートの場に連れて行かれたときは、さすがに子供心に驚いたが。

父も自分も、なんとなくそんな姉妹の心情を知っていたように思う。

父も、入り浸る義妹を嫌がるかと言えば、そうだったこともなかった。穏やかな父は、いつも笑顔で――彼は笑顔でないことのほうが珍しいのだが――迎え入れていた。あまりに普通に受け入れており、広貴はそんなものなのかと違和感を抱くこともなくすごしていた。

他の家族という形は知らないが、たぶん父も母も叔母も、自分の

家族という枠の人間にひどく甘かった。それは、家族というものを早くになくした人間たちの集まりだったからかもしれない。そしてそれに習った広貴も、おそらく家族に甘かった。あるいは、ごっこ遊びをするように、全員で仲良し家族を楽しんでいた。

そんな家族だった。

そのため、父親は母親が顔をしかめている理由を正しく読み取った。母親は妹の心配をしているのだ。

それを素直に出せる性格ではなかった彼女に代わり、苦笑しながら言葉を返す。

「じゃあ、20時ごろにはじめられるように準備しておこうか。

あんまり雪が降らないといいね」

「もう、なんだってこんな日に出勤なんだか…」

明らかに機嫌が悪い母親を父に任せ、広貴はマフラーと手袋を外して洗面所に向かった。ぴりぴりしている母親に怒られる前に手洗いとうがいを済ませる。君子危うきに近寄らずだ。

ゆすいだ水を吐き出して顔を上げれば 幼い自分の顔が映る。母によく似ていると言われる顔は、はつきりとした目鼻立ちだ。成長したときには、真顔の父のように勇ましい顔立ちになればいいのだが。

その顔は、ふてくされたような膨れ面だった。

広貴は、叔母をそこまで心配もしていない。彼女は自分に比べて

大人だ——少なくとも、このころはまだ、大人でも心配をする必要があるとは思っていなかったように思う——なので、広貴の心配は別のものだった。

叔母が来れなくなったら困るのだ。彼女に預かってもらっているものがある。

川中家では、広貴以外にサンタクロースは来ない。彼以外は子供ではないためだ。

とはいえ、このお互い大好き家族はそれで満足しない。「大人もいい子だったよね」と讃えあい、それぞれ以外がプレゼントを準備する。

そんなわけで、父親への贈り物は母親と広貴と叔母、母親への贈り物とは広貴と叔母、叔母へは両親と広貴で準備をしたのだが。

準備した後の父と母への贈り物は、バレないように彼女に預かってもらっていたのだ。

来てもらわなければ困る。

それにこんな家族だから、彼女が来なければ始まらないだろう。

早く来い、とー。

広貴は顔を拭いて居間に向かった。見えるところにいないと、母はより機嫌が悪くなる。

「ただいまー！！」

「ごめん、遅くなった！」

時刻は20時半になろうかという頃。

母とよく似たショートカットの女性が、鼻の頭まで赤くし息を切らせ、勢いよく玄関を開けた。

「遅い！」

「…」

眦をあげた母親が不機嫌そうに対応する。とはいえ、先ほどまでの張り詰めたような雰囲気は霧散している。

「大丈夫だった？」

「寒かっただろう、と…」

父はいつもどおりニコニコと彼女を迎えた。あとに固まった。見れば母親も、叔母本人も顔を引きつらせている。

不思議に思っただけで彼女を眺めた後、広貴は理由を理解した。

彼女はいつもの通勤鞆の他、たぶん贈り物が入っているのだろう大きな荷物を1つ、そして。

テーブルの上に乗っているのと同じ、有名なフライドチキンチェーン店の、バケツ型パーティー用パックを抱えていた。

バケツの中身をご存知だろうか。

あの中身は、チキンだけではない。サラダボウルとワンホールケーキが入っている。そして、広貴と父はケーキ屋にも寄っている。そう、この家には、すでにケーキが2ホールあったのだ。

そして、たった今それは3ホールになった。

引きつった顔で母親が尋ねる。

「…透子、あなた注文はどうやったの？」

「電話予約…」

「貴ちゃんと同じだねえ。」

さすが姉妹だ」

感心したような父の声に、母と叔母が頭を抱えた。余談だが、父は母のことを貴ちゃんと呼ぶ。

ようするに、母も叔母も、実態をよく知らずに予約したわけだ。

結果のケーキ3ホール。

「これから、しばらくケーキに困らないね」

「1日1個じゃすぐなくなるじゃん」

ニコニコとした父の声に唇を尖らせれば、頭を抱えていた二人が顔を上げた。

「よく言った！

そうだよね、ひーちゃん！」

「ちよつと！

一気にそんなに食べちゃ駄目でしょう！？」

タイミングはぴったりだが、内容は正反対。

とはいえ、おそらく母親は折れるだろう。今日からしばらくはケ
ーキ祭りだ。

平和な日常の一コマだった。

覚めたくないような、遠い日の、夢。

目が覚めた。

体を起こし、頬が冷たいことに気づく。触れれば、頬が濡れてい
た。

舌打ちをして、片手で顔を覆い、膝を抱える。

夢と自覚した夢ほど空しいものはない。それが、覚めたくないと思
う過去ならばなおさら。

今日もいつもどおりだ。

いつもどおり、彼の家族はすでにどこにもおらず、この世界には
なんの面影もない。

穏やかな父も、しっかり者の母も、おおらかな叔母も、皆鬼籍に
入っている。

覚めない悪夢を見ているような気分を味わう時期は当に過ぎたと
はいえ、たまに見る夢が幸福であれば幸福であるだけ、彼は取り残
されたような気分を味わうのだった。

体を起こす。いつまでも寝台にいるわけにもいかないし、こんな

016 誘拐犯の潜伏先にて

前略、ひーちゃん

おばさんは、街中で強制クエストに巻き込まれてちょっとピンチです。装備的には手ぶらに近いですが、まあ何とかします。

ここは、なんていうか、すごい居心地が悪いです。早くひーちゃんに会いたい。おばさんもがんばるので、ひーちゃんもがんばってね。あ、でも無理はしちゃ駄目だよ。

透子より

追伸：写真が手元になくて寂しいので、また撮らせてください。

「何考えてるのー？」

「ひいひいえ!？」

耳に声を吹き込むように声をかけられ、全身に鳥肌が立った。

明かりの下で見た誘拐犯の男は、色黒で大柄だった。頭髪は黒で、細かいみつあみがたくさん編まれている。琥珀の目と発達した顎がの野性的を通り越して獣じみていた。ステータスに流れ表示されたとおり、ジャガー人なのだろう。

アレイスタは、その発達した顎で齧られないか不安で仕方なかった。

現在の彼は、上機嫌でアレスタの髪を撫で、匂いを嗅いでいた。鼻歌でも歌いそうな気配だ。

「何も…」

考えていません。

アレスタはとつさにそうごまかそうとしたが、覗きこむ男の目は茶化していても笑っていない。はじめに牙を見せられたせい、穏やかに話していても、一皮向けば獰猛な気配が透けて見える気がする。

従兄殿のようにうまく牙を隠していてくれればいいのだが。

喉の奥で唸って、とりあえず本当ではないが嘘でもないことを口にする。

「…ええと、その。

恥ずかしいので、降ろしていただきたいなあ…」

「えー？」

それまでニコニコとしていた男が顔を上げる。がらりと真顔になった彼は、周りをぐるりと見渡した。

「お前ら」

殺意さえ滲ませた気配に、周りが凍りつく。アレスタを含め。そう、室内には他にも複数人がいたのだ。

「じろじろ見てんな。

恥ずかしいってんだろオ？」

慌てて逸らされる視線。なんていうかごめんなさい。っていうか誰か助けてくれ。

「ああん、何やってんだア？

邪魔だからさあ、出て行って言ってんだよ」

「し、しかし…」

たじろいだ男たちがこちらに顔を向ける。すぐる視線に負けてアレイスタは顔を下げる。

半数はそそくさと逃げていった。

お願い、こつち見ないください。

助けを求める視線をよこされても困ります…！

冷や汗をたらだらかきながら、内心呻く。気分は蛇ににらまれた蛙だ。

引きつりそうな顔を必死で抑えて愛想笑いを貼り付ける。なんと
いう忍耐、と自分に拍手を送った。下手に機嫌を損ねて、ぶちつと
やられたくない。

視界の隅で文字が踊る。

【忍耐の神の拍手を得ました】

【スキル「猫かぶり」がLV3に成長しました】

ちくしょう、なんでこんなスキルばかり…！

…何がどうしてこうなったのか。

水路脇で遭遇したジャガー男は、アレイスタを捕獲した。

それも、アレイスタが出そうとしていた信号弾をその場でたたきつけ、彼女を抱えて屋根の上を逃走するという、大胆不敵な方法で。おかげで、付近の隊士が慌てて駆け寄ってくるのを尻目に、屋根の上を逃走した男によって、アレイスタは凄まじい速度の上下平行運動を強制的に味わされた。下ろされても腰が抜けていただろう。間違いないこの人生で一番スリリングな経験である。全身硬直して舌を嚙まなかったのがせめてもの救い。

シートベルトなしのジェットコースターのような経験をした後に着いた先は、屋敷と言っているほどの大きさの一軒家だった。居間か応接室か、はたまた談話室かといったところに、彼女を抱えた男は入った。

室内には数人の男性がいた。皆、肌は浅黒く、半数は黄色とオレンジ、黒が入り混じった頭髪を持っており、もう半分は灰白色の頭髪を持っている。

前半数は短い頭髪の男に梅花紋が見えたので、こちらは皆ジャガー人なのかもしれない。

その先客たちのリアクションは、驚愕し怖がりつつといったところ。恐々と遠巻きにこちらの様子を伺っている。

怖いというか、気持ち悪いのかもしれない。
この状態が。

そう考えて、アレイスタはげんなりとした。

現在の彼女はソファの上部にいる。直接座っているわけではなく、下と後ろに誘拐犯の黒ジャガー男がいた。

わかりやすく言えば、彼の膝の上である。

居心地は地を這うように悪いが、それでも安全なだけいくらかマシだ。屋根の上を高速で移動したときは気持ち悪いし高いしで死ぬかと思った。強張りも溶け、甥っ子への手紙というよそ事を考える程度の余裕は出来てきている。

…逃避かもしれないが。

アレイスタとして自分の容姿くらい自覚している。

厳つい恐ろしい色黒みつあみ男が小娘を膝に乗せているのは、少女愛好家じみてさぞ気持ち悪かるう。ドレスを着ていないのがせめてもの救いだ。

不機嫌そうに周りを追い出そうとし始めた誘拐犯は、他の男たちに怖がられているようだ。

時々うつかりと近寄ってくる者も――ジャガー人らしき者のほうだ――、男に睨まれればすぐに退散している。部屋の人数も少しずつ減っていた。

が、彼らがいなくなった途端に齧られでもしたら洒落にならない
アレイスタは、心の中で周囲の男たちにエールを送った。頼む、居てくれ！怖いんだから！

「名前は？」

「聞いていい??」

「はあ…。」

「ええと、アレイスタ・ゴメスです」

「へえ?」

男が興味深そうに片眉を上げた。アレイスタは男性名である。

こちら側では、当初未分化だったため博士が男性名をつけた。

あちら側では、透子が「あれ、椅子だね」を文字って適当に付けた。が、男性名だと知らなかった。

それだけのことだ。実に適当である。

「なんて呼べばいいかな？」

「アルは嫌なんだけど」

「はあ…その。」

「別に」

ゴメスさんかアレイスタさんでいいのだが。

「長い名前だもんね。

家族からそうは呼ばれてないでしょ？」

…どうやらそれは許してもらえそうにない。

「ええと、ターシャと」

「ターシャね。

いくつ？」

「孵化して6年になります」

「ふうん、大侵食の頃？」

若いね。

俺は、」

「ダミアン！」

と、ばあんと扉が勢いよく開いた。入ってきたのは3人ほどの男。見た顔ばかりなので、どうやら先ほど逃げ出した男たちが助っ人を呼んできたらしい。助っ人は見覚えがないのは、先頭の男だろう。

他の男たちと同じような浅黒い肌に、一段と白い頭髮、そして陰しく細められた目と、眼鏡。

それを見て取り、アレイスタはおやと思った。眼鏡はかなり珍しいのだが、今日はこれで2人目だ。1人目は、…名前が思い出せないが、道で出くわしたサー・エセルバートの同僚の、迷惑でないほうだ。

彼は、アレイスタを抱える男を見てさらに顔をしかめた。

ジャガー男は、と言えば、会話を切る形での登場に不機嫌な気配を漂わせている。それに気づいたアレイスタは身を硬くした。

「…その少年は？」

「ああ？」

「お前なあ…」

「…？」

「…ああ。少年を膝にのせてるように見えてたんですか…」

一瞬、誰のことを言っているのかわからず、反応が遅れたアレイスタである。

確かに少年を浚って抱いていると思われたら、怖がられても仕方ない。が。

わずかに視線を落として自分の胸元を見る。

「…そんなにないだろうか。」

うなだれたアレイスタに、白髪眼鏡はわずかにうつろたえたようだった。周りはさっと視線を逸らしている。

「…その。」

大丈夫だ、ドレスを着れば見えると思うから…」

アレイスタは内心悲鳴を上げたが、対する白髪眼鏡はわずかにたじろいだけで特に怯んだ様子もなかった。慣れているのかもしれない。

「…ああ。

確かにわからない。

が、今は急ぐ時だ。

おまけに…」

ちらりと彼は視線を落とした。その対応に、デミアンは毒気を抜かれたようで、まどっていた物騒な気配が霧散する。アレイスタは深く息をついた。怖くて息を止めていたのだ。

「あん？

なにかあったのか」

「少し動きが早い。

相談したいとのことだ」

「…あの爺、俺を呼びつけたのか？

クソ…」

不愉快そうに鼻を鳴らしたダミアンは、だが意外なことに大人しく彼について行くようだ。アレイスタを立たせ、立ち上がったダミアンを見て、白髪男は頷いた。

「ごめんね、ターシャちゃん。

ちよつと待っててね」

彼がいなくなったら危ないかな、とちらりと考えたが、いると何しろ怖い。プレッシャーに負けて息が詰まりそうな空気よりは、話

し合いの余地があるかもしれない分、他の人間のほうがずっといいだろう。

申し訳なさそうなダミアンを、にっこりと心からの笑顔で見送る。いつてらっしやいませ！

男たちの一人にちらりと視線を走らせた白髪眼鏡が、指示を出した。

「彼女を、あの部屋に連れて行っておいてくれ」
「俺がですか！？」

悲鳴じみた声に、みつあみ頭と白髪頭がそちらを向いた。怪訝そうなこちらの様子に、居心地悪そうに視線を逸らした。

「その、身ごなしが。
隙がないように見えたので…」

…??

ダミアンと白髪男の二人が、アレイスタを振り返る。じっと観察するような視線に、アレイスタは身じろぎをした。

と、何かに気づいたらしいダミアンがはじかれたように笑い始めた。同時に、白髪眼鏡が実に奇妙な顔をした。

自分からゆっくりと視線を逸らす男に、アレイスタは感づいた。この男、笑いをこらえているな。

彼は、ごまかすように咳払いをした。

「…それは、彼女の加護のせいだろう。
気にしなくていい。」

その…そう見えるだけだ」

見掛け倒しだと強調する男の言葉で、アレイスタもようやく気づいた。

アレイスタには自己愛の神の加護がある。副次効果は「かっこいいポーズを取って、相手を挑発することができる」。

そのいらん副次効果がこっそり発揮されていたらしい。勝手に。そのために、動作のひとつひとつが「かっこよく」なっており、隙がないと受け取られ、警戒されていたのだ。なんて迷惑な。

再度うなだれたアレイスタに、白髪眼鏡はまたうるたえたようだった。

「…その。」

大丈夫だ、見かけがかっこいいだけだから…」

やっぱり慰めになってない。ダミアンは、その言葉にさらに笑った。

「…いえ…」

「ごめんねー、ターシャちゃん。」

こいつらアホでさー」

…やめてください。

なんか、すごく傷つきます…。

今までの登場人物まとめ（前書き）

今までに登場した人物の一覧。まとめなので、一番初めに見るとネタばれになるかもしれません。また、チヨイ役の方も載ってます。絵が付くので、自分のイメージを大切にしたい方は飛ばしてください。

今までの登場人物まとめ

アレISTA・ゴメス

> i 3 8 7 6 5 — 4 8 1 3 <

本編主人公。魚人の雌性体、孵化して6年目。何かと苦勞が絶えない星の元に産まれてしまった様子。

亡くなった博士と2人で大地母神の枝毛島に住んでいたが、山下透子の記憶を唐突に思い出し、甥っ子のひーちゃんを探そうと試みる。画像はかっこいいポーズが適用されて強そうに見えるが、戦闘力はほぼない。

愛称はターシャ。

やましたとおこ 山下透子

> i 3 8 7 6 6 — 4 8 1 3 <

甥っ子と2人暮らしをしていた。未婚。

召還事故と思われるつむじ風に甥っ子とともに巻き込まれ死亡、享年32。

ロザリア・ゴメス

アレISTAの義母、海洋学研究者。アレISTAが心の中で博士と呼んだらこの人。

享年63歳。

かわなかひろたか 川中広貴

> i 3 8 7 6 7 — 4 8 1 3 <

山下透子が猫可愛がりしていた甥っ子。

叔母とともに、召還事故と思われるつむじ風に巻き込まれる。現在
消息不明。

父親が広幸で母親が貴子だったので広貴、というどうでもいい設定
がある。

愛称はひーちゃん。

レネ爺さん

大地母神の枝毛島に来れる腕のいい漁師。

サー・ウォルター

ゴメス家顧問弁護士。

ミス・リップ

漁村で雑貨屋を営む。

サー・エセルバート・ゴメス・北征勲爵士

ナイト・コンクエスト・ザ・ノース

> i 3 8 7 6 8 — 4 8 1 3 <

アレイスタの義従兄。近衛隊所属の大尉。押しが強い。

いつも笑顔で怖いと思ったら真顔はもつと怖かった。

正式名は糞長い。画像の衣装は式典用の礼装。

サー・リチャード

サー・エセルバートの父親。

栗鼠嬢

魔道具店ホップ・ステップ・ジャンプの受付嬢。

イムホテップ

魔道具店ホップ・ステップ・ジャンプの職人で、専門は武器。
サンタクローズに似ている。愛称はホップ。

ステフェン・スクルド

魔道具店ホップ・ステップ・ジャンプの職人で、専門は防具。
ロザリア・ゴメス博士の遺品である懐中時計型の魔道具も彼の作品。
背高。愛称はステップ。

ジャン・ポール

魔道具店ホップ・ステップ・ジャンプの職人で、専門は武器・防具
以外の道具全般。
小柄。愛称はジャンプ。

ヴィンセント・ディオ

街中で会ったサー・エセルバートの同僚で司法隊所属。虎人で、非常に人懐こい人物。わかりやすく言つと迷惑な方。愛称はヴィンス。

オットー・ペイン

街中で会ったサー・エセルバートの同僚で司法隊所属。ヴィンセントのせいで苦労している様子。

東方の出身か肌の色が象牙。眼鏡着用。

アルヴィン

ふわふわきらきらした少年。葉のような形の耳を持つ。迷子になっていたのをアレイスタが保護するが、襲撃を受けた後だったらしい。

バージル・ライアン・エリス・アルフレッド

アルヴィンの伯父でエルゲントス王国の皇太子殿下。襲撃により行方不明になっている娘の探索について、アレイスタに協力を依頼。

ラトウィッジ・ギャヴィストン

厳しい雰囲気を持ち、眼帯をしている。
近衛隊隊長。

バーナード・バーン

筋骨隆々、岩のような男。もみ上げがすごい。
近衛隊副隊長。愛称はBB。

デーヴィッド・フォーサイス「ノースベロー

幼い印象の癖のある金茶の髪の隊士。

ダミアン

アレイスタを浚った黒ジャガーの男。
猛獣じみた気配が怖い。

■ ■ ■ ・ ■ ■ ・ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

> i 3 8 7 6 9 — 4 8 1 3 <

成長した川中広貴。断章に登場。

叔母は死んだと認識している。

伏字と画像の塗りつぶしは一応ネタばれ対策。でもそのうちシルエ
ットでバレるかも。

白髪眼鏡の男

黒ジャガー男、ダミアンの一味。

017 2人と2人

お部屋の中は嵐みたいです。

まだ廊下だけどがんだん聞こえます。開けて入るのを躊躇する怒涛のような女の子の怒鳴り声。見張りらしい男は、耳が痛いように抑えている。

先導役の男に頷き、そつとわずかに扉を開ける。とたんに更に響く声。

「おだまり！

まだ言うの！」

「なんと仰られましても！

私は聞き入れられません！」

…おや、言い返した。こちらでも女性のようだが、まあド修羅場である。

「…なんて言うか。

あんたも、本当にツキがないよな…」

「私もそう思います…」

同情のこもった視線を送られた。なんだろうこの妙な連帯感。

殊更大きい音を立てて扉を開いて貰えば、2人とも口をつぐんで

ぱつと顔をこちらに向けた。

1人は、成人女性だった。こちらが言い返した方だろう。紺色の制服から、すぐに隊士だとわかった。亜麻色の前髪をまっすぐに切っているのが少し風変わりだが、まあアレイスタが指摘できるようなことでもない。後ろは邪魔にならないようにか結び上げられている。

全体的に少し薄汚れており、整った口元も切った痕があった。髪も解れが目立つ。服の染みは、血だろうか。

そしてもう1人。騒いでいた方は。

王子によく似て、ふわふわきらきらとした容姿の少女。質が良いが古臭い型のドレスとジャケットを着ている。背丈は、小学校高学年から中学校ほどか。そして、どうやら発育もよろしいようだった。

…てつきり幼女かと思っていたのだが。

…自分の胸元を見て、複雑な気分を味わう。
種族の違いだろうか、それとも栄養状態の違いだろうか。

女騎士が、幼女じゃなかった姫君を庇うように前に立ち、誰何の声をあげた。

「…そなたは？」

「はあ。」

誘拐されてきました」

言ってから、なんて間抜けな台詞だろう、とアレイスタは思った。見る、胡散臭い目で見られている。

「その…運が悪くて」

「…名前は」

「アレイスタ・ゴメスです。」

ロザリア・ゴメス博士の養子で、エセルバート・ゴメス卿の従妹いとこにあたります」

警戒されないように従兄殿の名前を出しつつ、血のつながりがないことを言っておく。どうもあの血筋は反則らしいので、下手に期待されては困る。

「…ゴメス大尉の？」

「はい。」

姫君と騎士様の探索に協力していました」

捕まってしまうましたが、と苦笑すれば、緊張を解いたらしい姫君が前に出てきた。慌てて女騎士が彼女を止める。

「姫様！」

「私たちをだますメリットがあつて？」

「ですが」

肩を竦めた姫君に、女騎士が言葉に詰まる。振り返った彼女はアレイスタを上から下までチェックするように眺め、にっこりと笑った。

「ちょっと頼りないけど、仕方ないわね。」

協力して無事に帰りましょう」

ね、と首をかしげた姫君に笑い返そうとしたところで、女騎士が

声を上げた。

その硬い表情を見て、ああ、イヤな予感がするなとアレイスタは思った。

「私は、何があっても殿下を優先します」

そう言つて、女騎士は更に言葉を続けようとした。

とたんに姫が顔をこわばらせ、鋭い声で後の言葉をかき消した。

「止めなさい！」

できたら聞きたくない。推察できるようなヒントは勘弁してほしかった。

「あなたは、また私の命令を聞かないつもり!?」

…のだが、アレイスタの願いなど聞き届けられたことはないのだ。

あの少年。

自分に頭を下げるアルヴィン王子を見て、アレイスタは別人のようだと思った。

彼は、アレイスタに抱きついて小1時間泣いた。怖かったのだろうなと思った。幼い少年としては当然だ。ただ、その後、彼は非常に落ち着いて状況を隊士に説明していたように見えた。自分の感情をコントロールして、それこそ別人かと思うほど。

それが、奇妙に感じた。

態度にブレがありすぎる。動揺したからだと言われればそれまで

なのだが、多分そんなことではなくて。途中で子供が大人になったような違和感があった。

嫌な予感がしたから、それ以上は考えなかったのだけれども。棚上げは得意だ。

「…私は、誓いの元、自分の職務を真つ当するだけです。どんな時でも」

ただ、どうもこの場合は、それでは許してくれないようだった。

「それが私を傷つけても、あなたはそうするの!？」

姫君の、悲鳴のような声が響いた。

女騎士は、姫君の言葉に答える気はないようだった。

彼女は、アレイスタをひたと見つめて、言った。

「…あなたにも、協力していただきたい」

「私は！」

誰かの犠牲などイヤよ!」

つまりは、そういうことなのだった。王子は囿に使われたのだ。

あの少年が同じことを問われたか自ら悟ったか知らないが、覚悟して受け入れたに違いない。

だから、助かって気が抜けて大泣きした。おそらく助からないか怪我か、そういった覚悟をしたのだろう。でも彼の予想に反して従姉はまだ保護されておらず、責任を感じた彼はそこで意識を切り替えた。王子として。

出来ることを落ち着いてこなし、必死に頭を下げた。

大したものだ。だが。

アレイスタは、姫君を見た。

彼女は、涙の膜が張った目を険しく吊り上げ、女騎士を睨みつけている。

彼女の様子を見るかぎり、彼を囷にしたことは、受け入れがたいことだったに違いない。

それに。

ちらりと見れば、女騎士は身じろぎもせずアレイスタを見据えていた。

おそらくは、対する彼女も。

王家に忠誠を誓う者が、彼にそれを頼む、それがどれほどつらいことか。

「…いい？」

彼女の言うことを聞いては駄目よ」

彼女らと王子は、自分や甥っ子とよく似ている。

「協力を要請します」

「お黙り！」

アレイスタは、いや透子は、思い出した後すぐに甥っ子を探しに行くための手筈を整えた。そして、それが出来ることに感謝した。

本来であれば、彼女は終わっているのだ。甥っ子にトラックから庇われたとわかった時の脱力感、あの砂を噛むような感覚は、きつと絶望に似ている。

透子は、つむじ風を起こした相手に、それこそスライディング土下座で感謝してもしきれないほど感謝している。もっとも、甥っ子に怪我でもさせていたらぶん殴ってやるつもりなのだが。

と考えて、ああ、手の甲を切っていたなと思い出す。よし殴ろう。

いずれにせよ、早く見つけて、あの子を安心させなければならぬ。

甥っ子は前を向いてくれていると思うが、その心に傷をつけたかもしれないことは許せない。あの子が自分と同じような絶望を味わったならばそれは漱ぐべきだ。

少なくとも、あの子が苦しんだと思えるくらいには、互いが大事なだった自信がある。

子供はそんな傷を負わなくていいと、彼女は思う。
なので、安心させるようにふわりと笑った。

「私がどうしてここにいいのか、申し上げるのを失念していました」

先ほどまでの勢いはどこへやら。呆けたようにこちらを見ている姫君と女騎士に、ゆっくりと言いつけるように続ける。

「私は、従兄殿と王都を歩いていたときに、1人の少年を保護しました」

「……？」

まさか！

一瞬不思議そうに首を傾げたあと、姫君はぱっと顔を輝かせた。女騎士も息を飲んで成り行きを見守っている。

「王子は元気です。」

「…あなた方を心配していました」

「ああ！」

妖精王よ、感謝します！」

くしゃりと顔を崩して泣き笑いのような表情をした姫君から、女騎士に視線を移す。

彼女は、気が抜けたのか、それでも思うところがあるらしく微妙な顔をしていた。その心情を予想しながら、さらに言葉を続ける。おそらくは喜びの他に罪悪感と、また彼に憎まれていたらどうしようという不安。

「ルディ姉さまと、エスをよろしくお願いします、と」

でも、そんな後ろめたさは、あの少年の望むところではないはずだ。

「…！」

「…ああ、ああ…殿下…！！」

なんてこと…！！」

思わず、といった形で嗚咽を漏らしはじめた女騎士を見て、姫君は毒気を抜かれたようだ。アレイスタと顔を見合わせた彼女は、くすりと笑って女騎士を抱きしめた。

2人を眺めながら思う。

あの子と飛んだ先がここでなかったらとは考えない。少なくとも、トラックで即死よりずっとマシな結果になったはずだ。

砂粒ほどでも希望があれば、透子であるアレイスタはそれに向かって頑張れる。彼女はハッピーエンド以外認めない。

017 2人と2人（後書き）

笑ってはいけないはいつもすごいすよね。
もんまりは名言。すごい匂いというか気配が想像できます。すばらしい。

さて、今回はちょっと毛色が違いましたが、いかがでしたでしょうか。次回はまた戻りますが。
ちなみに自分は超書きやすかったです。地の文に近いしな。

下記、ちょっと追加のお知らせ。

014 作戦会議：

「彼は落ち着いた受け答えをしている。」
↓「彼は別人のように落ち着いた受け答えをしている。違和感を覚えるほどだ。」

読み返して、もうちょっと強調してよかったかなと思ったので、こっそり付けました。すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5258x/>

魚人転生者と召喚被害者

2012年1月13日21時54分発行